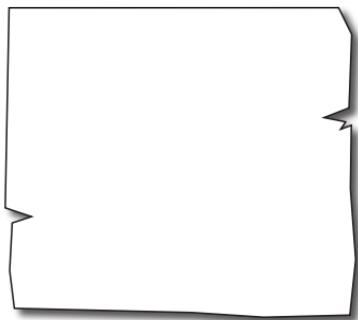


# 7 THE 7 FRAMES FOR ALL LIFE 7つのワクワク枠

## エピローグ ～分岐点～



木岬 さんぽ  
KIMISAKI SAMPO

地球人類も  
いつかここへ——。

妻<sup>るね</sup>瑠音、親友<sup>ここえ</sup>心笑君、おじいさん…と生み出し合う  
青年期 - 壮年期さんぽのフルーツフル誕生物語

SAMPO FRUITS



# 7つのワクワク枠

## エピローグ

### '94 春 (7ヶ月後)

学生当時の、その研究発表の内容は、そのまま論文にまとめられ、マイナーな文献に掲載された。しばし反響があったらしかったものの、その後、ほとんど、みんなに忘れ去られてしまったらしかった。

そのことは、大学の必修のカリキュラムをこなすのがハードになりつつあった一人の医学生にとって、かえって、ありがたかった。

### '95 初夏 (1年9ヶ月後)

瑠音は、夢を実現して、晴れて小学校の教師となっていた。その小学校は、大学生時代に暮らしていた地方都市の郊外にあった。

大学5年生の僕は、基礎臨床修練と呼ばれる実習が始まっていた。

### '96 初夏 (2年9ヶ月後)

瑠音は、小学校で、子どもたちを相手に、はりきっていた。

大学6年生の僕は、医師国家試験に向けた勉強に明け暮れていた。

そのころには、大学内のポストを得るべく大学院に進学して学問をする道は、すっかり断念していた。ライフサイエンスの研究の現場の様子を肌身で知った僕は、“生計のための臨床の合間に自分のペースで好きなようにコツコツと学問——知愛を続けるのがベストだろう”という結論に達していたからだ。

### '97 春～ (3年7ヶ月後～)

医師国家試験に合格した。卒業後に所属した医局の意向で臨床の内科研修をすることになった僕は、県外の地方病院に就職した。

その医療現場で、バリバリの臨床医の仕事が生半可な気持ちでは勤まらない現実を肌身で知った。

夜中の2時ごろに(当時及し始めていた)ポケベルで呼び出され、雪の中、自転車のペダルをこいで病棟にたどり着き、患者さんの最期を看取ったこともあった。あるウイルスが、患者さんから自分に感染してしまったかもしれないと不安にかられるようなアクシデントもあった。

休日に、いざというときのためにポケベルを持ち待機していたこともあった。患者さんに感情移入しすぎて、涙を抑えられないこともあった。ストレスで心身を病みかけたこともあった。

…

周囲の先生に何度も助けられた。

睡眠を削りながら、感染症のリスクを背負いながら、ストレスを抱えながら…つまりは寿命を削りながら、淡々と仕事をこなし続けるバリバリの臨床医の先生方を心底尊敬するようになっていた。

ドジして周囲に頼ってばかり、バランスくずしてばかり…の自分は、臨床医として、明らかに失格で、——落ちこぼれだった。

### '98 春 (4年6ヶ月後)

臨床は、中途半端な覚悟では勤まらない。

僕にとって、バリバリの臨床医の仕事は、学問の片手間にできることじゃない。僕にとって、バリバリの臨床医の仕事は、心の自由を奪い、身も心もズタズタにして自分を学問どころじゃなくさせてしまう激烈なストレス源だ。それに何より、このままでは、患者さんたちをはじめ、多くの方々に迷惑をかけ続けてしまう。

僕は、意を決して辞表を出し、依願退職した。

この体験は、自分に向いているのは、面と向き合って直接特定の誰かのために貢献することではなく、コツコツと何かを育むことで間接的に不特定の誰かのために貢献することだと僕に確信させた。

僕は、コツコツ何かを創り上げることによって、間接的にみんなに貢献するのが向いている——そういうタイプの人間だ。

思いきって仕事を辞めてしまった僕を、それでも「好きなことをするのが一番よ」と励ましてくれたのは、瑠音だった。

この退職を期に僕は、大学時代に住んでいた地方都市に舞い戻り、念願の自由を取り戻し、本格的に学問——知愛に専念し始めた。

なけなしの貯金だけを頼りに——。

## ’99 初秋 (5年後)

念願の自由を取り戻して、本格的に学問——知愛に専念して半年、貯金が底を尽きかける前に僕は、細々とアルバイトを始めることにした。最初の半年近くは、なぜか、近くのスーパーで品出しのアルバイトをさせていただいた。バイト代は確かに安かったけれど、それでも仕事は楽しく、ありがたかった。

## ’00 春 (5年7ヶ月後)

その後、幸いにも、研修医時代に一度経験のあった、精神的な負担が比較的少なくて、なおかつ、迷惑がかからず、自分でも役に立てる“医師としての仕事”に巡り会うことができた。

おかげで、生活が、ある程度、安定し始めた。ありがたかった。

## ’01 夏 (6年10ヶ月後)

非常勤のアルバイトの身分であったという意味では、確かに不安定で、裕福ではなかった。

それでも、そんな僕と、瑠音は結婚してくれたんだ。

婚約指輪を手渡していたくせに、どうしても口から言えないまま、それぞれ家路についてしまったのちに、その頃から世の中に普及し始めていた携帯電話のメールで伝えた。

君は、自分以上に大事な宝です。結婚しよう。さんぼ。

ありがとうございます。よろしくお願いします。瑠音。

——ありがたいのは、こっちの方こそだった。

それから、夢見ているみたいに幸せな新婚生活の日々が続いた。

## ’05 初秋～ (11年後～)

自分なりに学問——知愛の成果をコツコツと育み続けていた一方、赤ちゃんは、なかなか授からなかった。

本屋さんで、『タイミング妊娠法』という本に出会えたおかげで、妊娠検査薬で陽性と出るところまでは、たどり着けた。

それでも、心臓の拍動が確認されないままに流産することを、何度か繰り返したのだった。

本屋さんだけでなく、その頃には、一般に広く普及していたインターネットも利用しながら情報を収集して、試行錯誤を続けた。

過度のストレスが悪いことを知り、気をつけたこともあった。

電磁波のリスクを知り、彼女の電気毛布の使用を取りやめたり、僕の原付バイク通勤を取りやめたりしたこともあった。

彼女の遠距離自動車通勤がよくないだろうと思い、それを解消するために引っ越したこともあった。 …

でも——

その後、妊娠検査薬で陽性にもならなくなった。

このまま、ずっと授からないのかもしれない——

そのような悲観的な想いとらわれ、落ち込んだ。

それでも、瑠音は、自分でネットで“卵管造影検査”を見つけ、それを受けると言い出し、それにトライすることにした。

僕は、赤ちゃんをなかなか授からない悲しみを乗り越える気分転換のためにも、自分なりの学問——知愛の成果を、ほそぼそとウェブサイトで発表するべく、コツコツと準備し続けることにした。

## '08 春 (14年6ヶ月後)

ウェブサイト作りが一段落して、生まれて初めてウェブサイトをアップした。

それから、しばらく経ってからのことだ。

妊娠検査薬の陽性が確認されただけでなく、瑠音のお腹の中で、小さな心臓の拍動のピコピコが初めて確認されたのは——。

ミラクルだと感じた。

心底ありがたいと感じた。

こうして、僕らは、赤ちゃんを授かったのだ。

このまま、無事育ってくれ！

わが家の新たな宝になってくれ！

そう願い続けた。

## '09 冬 (15年4ヶ月後)

その日、仕事を終えて間もなく、瑠音の陣痛の知らせを受けた。僕は、職場から病院へと急いで自動車で直行した。

瑠音の出産に立ち会った。

その最中、出産が命懸けであることを肌身で感じ続けた。

どれくらい時間が経ったのだろう。どれくらいハラハラしたのだろう。どれくらい心が揺さぶられたのだろう。

瑠音は、ついに、赤ちゃんを出産した。

母子ともに無事だった。それが何よりだった。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。 音楽イン ♪ Birthtime

すやすや眠っている赤ちゃんを、ほっとして心笑みながら見つめている母の安らぎの時間——。

これで、僕は、もういつ死んでもいいや。

ぶっちゃけ、一瞬そう思っていたほどの自分が、そこにいた。

それから、さらに夢見ているみたいに幸せな日々が続いた。

音楽フェード・アウト ♪ Birthtime

## '09 初夏 (15年7ヶ月後)

あの岬にて——。

瑠音に抱かれている赤ちゃん——。

「おお、おまえさんたちの赤ちゃんかい？」とおじいさん。

「そうだよ」と僕。

「おお、おお、とつても、かわいらしいのお」 笑みを浮かべなが

らのぞぎ込むおじいさん。「——どっちかっていったら、母親に似ておるな？」

やさしい笑みを浮かべている瑠音。

「頭の“2つのつむじ”の位置は、父親とそっくりだぜ。アハハッ」

「どれどれ——、——あっ、本当じゃ。そっくりじゃ。

アッハッハッ！」とおじいさん。

「アハハハッ」と瑠音。

瑠音は、おじいさんに赤ちゃんを抱っこさせた。

やわらかな笑みを浮かべ続けているおじいさん——。

「わしゃあ、幸せもんじゃ。すごい幸せもんじゃ。ありがとうよ」

“3つ+1つ”の笑顔がそこにあった——。

## ’09 夏 (15年10ヶ月後)

「ワッー!!!」 瑠音の絶叫が家じゅうに響き渡った。

別の部屋にいた僕は、ドキリ！として、あわてて駆けつけた。

「いったい、どうしたんだい!？」と僕が尋ねた。

「おむつ取り替えようとしていたら、突然おしっこが始まったの。

噴水みたいに——。もう、びっくりしすぎちゃったよ〜！」

「——」 . . .

## ’09 初秋 (16年後)

我が子のお昼寝の前に、『Birthtime』のメロディーを使い、抱っこして子守唄のように歌ってあやしたり、おんぶして小さなキー

ボードで演奏してあやしたり…試行錯誤を繰り返していた。

## ’09 初冬 (16年3ヶ月後)

「おお!!」 「やったあ！」

我が子が初めて歩いた日——。

## ’10 春 (16年7ヶ月後)

我が子と一緒に、初めてと公園まで散歩した日——。

毎日、ますます夢見ているように幸せだった。

## ’11 春 (17年6ヶ月後)

大震災が直撃したのは、第2子の出産が近づいていた頃だった。

岬のおじいさんは、命からがら高台に逃げて無事だったけれど、家が地震と津波で全壊してしまい、仮設住宅で暮らし始めることになった。

両親は、その仮設住宅へ、度々、様子を見にうかがい始めた。

僕らも、被災していた。

停電、断水、ガス停止の生活を何日も強いられた。

“パンが食べたい”とリクエストした妊娠中の瑠音のために、道路のすべての信号が消えている中を、貴重なガソリンを消費して自動車ですーぱーにたどり着き、店外の大行列の最後尾に並んだ。

1時間以上並んだけれど、パンは売り切れで買えなかった。

しかたなく、代わりに、せんべいやスイーツを買って帰った。

## ’11 初夏 (17年8ヶ月後)

再び、瑠音の出産に立ち会った。出産が命懸けであることを、再び実感した。母子ともに無事であったことに、心から感謝した。

こうして、我が家で、新たな宝が増えた。

夢見ているみたいに幸せだった一方で、その後、原発事故の影響を含む、さまざまな厳しい現実と直面し続けた。

## ’11 夏 (17年11ヶ月後)

みんなで帰省した折、仮設住宅のおじいさんの元へ。

おじいさん語録——

「おお、こりやまた、かわいらしい子じゃ。おめでたいやき」

「上の子も、ずいぶん、大きくなったのお。ありがたいやき」

「わしゃあ、もう大満足じゃ。いつ死んでもいい」

「アイアイ愛じゃな。ワクワク枠、イキイキ息シリーズの最新版が見つかったわい。アッハッハッ！」

「おまえさん、ずいぶん、やせたんじゃないか？ この子らのためにも、体調管理、しっかりするんじゃぞ」 年をとって弱り、心配されるべきおじいさんが、逆に心配してくれた。確かに、その頃、原発事故を含む問題に対する心労がたたり、僕の体重は減っていた。

## ’12 初秋 (18年後)

岬のおじいさんが老衰のために亡くなってしまったという知らせを、親から受けた。その後、おじいさんからの手紙を受けとった。

若者たちへ

わしは、体力も、気力も、めっきりおとろえてしまって、今度こそ、そろそろな気がするから、最期の機会だと思って、手紙を書いておくことにするよ。

先日は、尋ねてきてくれて、どうもありがとう。

うれしかった。

思い残すことは、もう何にもないと言え、ウソになってしまうが—— それでも、わしは、もう十分満足じゃ。

ここまで年を取ると、いつ死んでもいいように準備してしまう。

“死 For All Life” もありじゃろうと思う。

遅かれ早かれ、人は、いずれ死ぬ。

お先に、旅立っておるぞ。

どんなに悪いときであっても、よさを見つけられる。

どんなにイヤなときであっても、好きを見つけられる。

どんなにつらいときであっても、喜びを見つけられる。

どんなに苦しいときであっても、ありがたさを見つけられる。

それが人生じゃ。

おまえさんらは、まだまだこれからじゃ。

幸せに生きるんじゃぞ。

これまで、本当に、どうもありがとう。

ありがとう。じゃあに。

岬のおじいさんより。

追伸、ちびちゃんたちにもよろしく。

追追伸、“アインシュタイン”にもよろしく。

## ’12 春 (18年7ヶ月後)

おじいさんの手紙を受けとってから半年ほど経った頃、アルバイト先の会社から、常勤の正職員にならないかと打診を受けた。

後から聞いた話によれば、やせたことで心配をかけてしまっていたことも影響していたらしかった。

とても、ありがたかった。とても——。

それでも、一抹の迷いが生じた。そのままアルバイトのままでも、なんとか、やっていけたし、学問——知愛やウェブサイト作りのための自由時間の減少が心配だったからだ。

## ’12 初秋～ (19年後～)

それでも、子どもたちの将来のこと、産休&育児休暇明けの溜音が仕事復帰できるかどうか微妙になっていたことを考え合わせ、その会社で、常勤の正職員になることを引き受けることにした。

その会社が常勤の正職員として採用してくださったおかげで、アルバイトだったときに比べ、生活がより安定し始めた。

確かに、自由時間が減った分、学問——知愛やウェブサイト作りのペースは落ちた。しかし、それでもしかたない、やむをえないのだと割り切ることにした。

## ’13 初夏～ (19年8ヶ月後～)

『大栗先生の超弦理論』という本に出会って、衝撃を受けた。

この本との出会いをきっかけにして、全く予想外に、物理学の特

大ブックサーフィンが始まり、物理学にのめり込むことになった。

それは、3ステップス自然哲学——3ステップス自然知愛の適用範囲をさらに深く広げようとする試みにつながっていた。

自由時間が減った中で、無理して取り組まざるをえなかった結果、ストレスで体を壊してしまったほど、しんどかった面もあったけれど、楽しくて、エキサイティングで、有意義に感じた面もあった。

## ’14 初秋 (21年後)

それから1年ほどの間、自己流で物理学に取り組んだ結果、光子や重力子の幾何モデルが生まれ、半信半疑だったけれど、ついに、重力が量子化できたかなと思えるような成果にまでたどり着いた。でも、その成果が、従来の物理学の常識、“エネルギー保存則”と真方向から対立していることに気づいたことで、おおいに戸惑った。

教科書に載っているエネルギー保存則が間違えているはずがないし—— こっちの重力の量子化が間違えているにちがいないだろう。それにしても、いったい、どこが、どのように間違えているのだろうか？

・・・

そのときだ。高校時代の心笑君のレアな笑顔が心に思い浮かんだのは。心笑君——ニュートン君、なつかしいなあ。

彼は、難解な数式がびっしり並ぶ物理学の教科書を読んでいたときもあったっけ——。

チンプンカンプンだった僕が「ずいぶん、すごい本読んでいるね」と思わず口にしたとき、心笑君は、「100%理解できているわけじゃないけど、僕もニュートンやアインシュタインみたいに、早く自然

(nature) のパズルを解いてみたいんだ」と、そっと僕に打ち明けてくれた――。

彼は、授業中に鋭い質問を投げかけていたこともあったっけ――。

「なぜ、 $F = ma$  が成り立つのですか？」と心笑君。

「それこそ、天才ニュートンが発見したことだからです」と先生。

『プリンキピア』には、 $F = ma$  の式がどこにも載っていません」

「厳密には、18世紀の数学者がこのような数式に表したからです。

それでも、その数式の起源は、まさに天才ニュートンの発見です」

「天才ニュートンは、どうやって、それを発見したのですか？」

「わかりません。ニュートンに聞いてください。ニュートン君」

どっとクラスメイトたちが笑った――。

ニュートン君――心笑君は、とりわけニュートンのファンであり、熱く語っていたっけ――。

「ニュートンって、すごいんだぜ」

「どんなふうに、ニュートンは、すごいんだい？」

「アインシュタインも成し遂げられなかったような大きな統合を成し遂げながら新しい物理学を体系化し、自然 (nature) との調和性を高めていたという意味で、すごいのだ」

「大きな統合――」

「ニュートンは、例えば、地上の物理学と天上の物理学を統合し、さらに、それまでの物理学の成果、コペルニクス、ケプラー、ガリレオ…の成果を統合したのだ」

「へえー。ニュートンってすごいんだね。てっきり、アインシュタインの方が、ニュートンよりもすごいと思っていたけれど――」

「ううん、比較なんてできないさ。確かに、アインシュタインも、すごいんだよ。それまでの常識を覆しながら、自然 (nature) との調和性をより高めるような発見を成し遂げているからね。

どちらとも、それぞれに、それぞれのすごさを持っているのだ」

「確かに――。――うん。君は、きっと、君にしかできない何かを成し遂げて、21世紀のニュートンになれるよ」

「ありがとう」 そう言って、レアな笑顔を見せてくれた心笑君。

あの心笑君――ニュートン君なら、きっと、何か教えてくれるにちがいない。今ごろ、彼は、いったい、どこで何をしているんだろう？

## '15冬(新春) (21年4ヶ月後)

ニュートン君――心笑君と再会したいという思いが募った僕は、お正月に地元へ帰省した折に、彼の自宅を訪れることにした。

彼は、意外にも、何かの事情で物理学の大学院を中退して、それから帰郷して地元の高校の物理学の教師になっていた。

久々に再会した心笑君は、これまた意外にも、名前らしく笑みをたたえ続けていた。もう笑顔がレアではなくなっていたのだ。

心笑君語録――

「教師になったのは、確かに最初は生活のためだったけれど、意外に面白いんだ。“先生、どうして  $F = ma$  が成り立つんですか？”という質問を生徒から受けた暁には、内心、震えるほど興奮して、しばらく脱線してしまったよ」

「それでも物理学をする夢は、ずっとあきらめていなかったよ」

「コツコツと自由に学問を続けていたんだ」

「今の自分はボランティア学者みたいなものだね」 …

そんな彼に、彼の書齋で、さっそく、例の成果を見せてみた。

彼は、食い入るように読んだ。何度も読み返していた。

「どうもありがとう——」 心笑君が、しみじみとつぶやいた。かと思ふと、「——うん、間違いない。ここから育まれる物理学は、従来の物理を根底から改善させながら、自然 (nature) との調和性をより高められる可能性がありそうだよ」と続けて言った。

「——え？ でも、エネルギーが保存されていないよ。

従来の物理学の常識と真っ向から対立してしまっている。だから、きつと、どこか根本的に間違えているんだろうね」と僕。

「——間違えているのは、従来の物理学の常識の方、例外のないエネルギー保存則の方さ」 全く意外な答えが返ってきた。

「え？ でも、エネルギー保存則は、常識中の常識だぜ？

いくらなんでも、それは、ありえないんでないかい？」

「その気持ち、とつても、よくわかるよ。僕も同じだったから。

でも、よく確かめてみたら、例外のないエネルギー保存則の方が間違えていると納得できるのさ。例外のないエネルギー保存則は、よく確かめられてこなかったウワサにすぎなかったってことなのさ」

「——たとえ親友の君の言葉でも、さすがに納得できないよ」

「——実証するよ。例えば、ここにりんごがある」 心笑君は、りんごの1つを手を持った。「ここでりんごを手放せば、どうなる？」

「落ちるよ」

「落ちて、そのあとどうなる？」

「落ちて、そしたら、大きな音が出て、りんごの一部がへこんで、

そのあと、りんごが転がるよ」

「そのとき、大きな音が出て、りんごの一部がへこんで、転がる際のエネルギー源は何だい？」

「位置エネルギーだよ。落下すれば、位置エネルギーが運動エネルギーへと転換する。その運動エネルギーが、大きな音を生んだり、りんごの一部をへこませたり、りんごを転がしたりするのさ」

「その通りだね。学校の授業で習った通りだよ。

では、次に、このりんごを、そうっと床に置いたらどうなる？」

「どうなるって——」

「大きな音、りんごのへこみ、りんごの転がりは、どうなる？」

「生じないよ」

「その通り」 心笑君は、実際にそうっとりんごを床に置いてみてから口を開いた。「ここで疑問に思わないかい？」

「どんな疑問？」

「大きな音を生じたり、りんごをへこませたり、りんごを転がしたりできたはずのエネルギーは、どこへ行ったのか？ って疑問さ」

「——どこへ行ったんだい？」

「消滅したのさ。そのことが、以上で実証されたことなになる」

「ええ?! 待った、待った。でも、エネルギー保存則によれば、エネルギーは消滅しないはずだよ。きつと、大気との摩擦熱とかに変化して、エネルギーが逃げたんだよ」

「同じような実験は、空気がほとんどない真空中でもできるよ」

「——」 ……

「確かに真空中では音が出ないけれど—— 落ちたりんごは、へこ

んだり転がったりするはずなのに、そうっと下ろせば、りんごは、へこまないし転がらない。大気との摩擦熱や音としてほとんどエネルギーが逃げようがない真空中において、りんごをへこませたり転がしたりできたはずのエネルギーは、いったいどこへ行ったんだい？」

「——」・・・消滅したとしか考えられない？ 「——ええ？！ エネルギーって、実は消滅するの？」

「そうさ。同じような実証実験は、卵や陶器の皿でもできる」

「——確かに」

「しかも、エネルギーが消滅する事実に加えて、自然界で一旦エネルギーが保存しているように見えている事実があるから—— 自然界のどこかでエネルギーが生成していなければおかしいってこともわかる。つまり、エネルギー消滅の実証実験から、エネルギーは、どこかで生成しているはずだってことも無理なく予想できるのさ」

「——」・・・

「実際、エネルギーの生成の例は、見つけられる。

例えば、従来の量子物理学においてさえも、すでに、短時間であれば仮想粒子が生成&消滅することを認めている。この仮想粒子が生成&消滅する過程では、平均エネルギーがプラスマイナス0であり続けているのではなく、その短い時間の間、平均エネルギーがプラスであり続けていて、その間エネルギーは生成しているんだ。

しかも、時空が不連続ならエネルギー保存則が成立しないことを、ネーターの定理が証明している。だから、プランクスケールで時空が不連続である君の成果において、光子や重力子の生成過程がエネ

ルギーの生成過程であっても全く問題がなくなるんだよ。

これらの意味で、エネルギーの生成は、自然 (nature) と調和しているだけでなく従来の物理学とも調和していることになるんだ。

しかも、例えば、電荷エネルギーや磁極エネルギーは、周囲に生成する仮想光子を何度剥ぎ取って光子を生成させても、その都度再生する究極の再生可能エネルギーでもある。この電荷エネルギーや磁極エネルギーからエネルギーを引き出す方が、質量エネルギーからエネルギーを引き出すより、はるかに安全で桁外れに効率がいい。例えば、陽子1つ分の質量エネルギーよりも、陽子1つ分や電子1つ分の電荷エネルギーの方が、 $10^{18}$ 倍以上も大きいから」

「 $10^{18}$ 倍以上——」 チンプンカンプンで意味もよくわからないまま、僕は、その部分を繰り返した。 ——心笑君には、かなわないや。

「そうさ。この桁外れに効率のいいエネルギー源こそが、あらゆる電磁波のエネルギー源でもあるんだ。太陽から地球へ届く光、電気ストーブから放出される赤外線、携帯電話やスマホから放出される電波も例外じゃない。もちろん、電子等の電荷が振動する際に、熱運動エネルギーとして周囲に散逸する形ではエネルギーが消費される。でも、同じ際に、生成した仮想光子がはぎとられて電磁波が周囲に放出される形だけではエネルギーは全く消費されないんだ。だから、太陽の寿命は従来の質量エネルギーを用いた計算より延びるし、健康被害を含め最近悪者にされることの多い電磁波は、上手に利用できれば、本来、人類の大きな味方になりうるのさ」

そこで、僕は決意を固めた。「——心笑君、ここから先は、ぜひ、心笑君が育ててみてくれるとうれしいんだけど、どうかな？」

「本当にいいのかい？ これを十分に育めれば、物理学を成熟させられて、もしかしたら本当に21世のニュートンになれるかもしれないんだぜ？ こんなに、やりがいがあってワクワクできる学問分野は、めったにないんだぜ？」

「いいも何も、誰より心笑君こそが最適役だよ。

それに、その方が、きっと全人類のためにもなっているよ。

——それに、恩返しでもある。

僕らが結婚できたのは、君のおかげでもあるのだから——。

それに、この試みが成功したら、これがきっかけとなって、君に、いい縁談話が舞い込むかもしれない」

「——フッ」

「心笑君——君こそ、21世紀のニュートンになってほしい。

それこそが、僕や瑠音を含めて、みんなが喜ぶことさ」

「——ありがとう。

実は、恩返しすべきなのは、こっちの方こそなんだよ」

「——え？」 ???

彼は、机の引き出しから、ある文献を取り出した。

それは、20年以上前の学生時代に僕が書いていた、あの論文を収録した文献だった。見るからに、ぼろぼろになっていた。

「それは——」

「そう。君の研究論文さ。君の成功が心底うれしくて、すぐ購入して、当時から読んでいたんだよ」

「——」

「結構ぼろぼろになってしまったけれど、ぞんざいにあつかったり、

保存状態が悪かったりしたせいじゃないんだぜ。何度も何度も読み返したからなんだ。ここ20年くらいの間に、何十回何百回と読みかえしているよ」

「——」言葉にならなかった。涙が込み上がり、しばし、涙ぐんだ状態のまま涙をこぼすのをこらえた。

「それで、君の論文がヒントになって——実は、僕も、すでに新しい物理学を育てていたんだよ。大学院に進学した頃から——。

この新しい物理学は、大学院を中退して帰郷する心の支えにもなっていた」

「——」 . . .

「だから、君の重力の量子化と、僕の重力の量子化が、瓜二つであるのを見て、驚いただけでなく、心底うれしかった。

それを見て、確信したんだ。間違いのないんだって——。

自分が進んでいる道が間違えていなかったんだよって、本家本元から、お墨付きをもらえたような気分だよ」

「——」 . . .

「君と僕は、別々に同じことを発見したことになるんだよ。

僕は、ずっと孤独に、ひそかに、この新しい物理学を育ててきたから、そのことが、どんなに心強いことか——」

彼は、机の引き出しから、プリントアウトされてクリッピングされていた用紙の束を取り出すと、重力の量子化の成果が載っているページを広げて見せてくれた。

確かに瓜二つだった。それでも、彼の成果の方が、はるかに厳密で、はるかに深みを持っていることは、一目瞭然だった。

ページを閉じた彼は、「まだまだ完全からほど遠くて未完成なのだけれど——」と言いながら、その用紙の束を、僕に手渡してくれた。

僕は、しばらく食い入るように読みながらページをめくり続けた。

心笑君が、はるかに先に、はるかに広く進んでいることは明らかだった。彼は、3ステップ自然哲学——3ステップ自然知愛の適用範囲を、物理学のほぼ全分野にまで広げていた。

「時間は無限じゃないから、どこかで切り上げなければならないんだけどね」心笑君は、静かに、そう言った。

心笑君は、素スピノル物理学としての体系化をすでに見事に成し遂げ、新しい物理学を誕生させていたように思われた。

それは、まさに、心笑君の健やかな自己実現——自己フルーツ化、そして、彼らしいフルーツの現出だった。

その成果には、さまざまな統合も含まれていた。

重力と電磁気力の統合

重力子と光子の統合

質量エネルギーと、電荷エネルギー&磁極エネルギーの統合

原始的な力、弱い力、強い力、中間子力のフラクタルな統合

素粒子物理学の標準模型における“3つ世代”のフラクタルな統合

静止質量エネルギーと運動エネルギー(≒熱運動エネルギー)の統合

ブラックホールの特異点とファイヤーボール(ビッグバン)の統合

新しいブラックホールの生成と新しい宇宙の生成の統合

...

それらの成果を読み取った僕は興奮しながら口を開いた。「すごいよ！！ アインシュタインもできなかった統合を成し遂げているよ！！ 自然との調和性が高まっているよ！！」

間違いないよ！！ 君は、まさに21世紀のニュートンだよ！！ 早く公表しようよ！！」

「——ありがとう。

でも、まだ自信ないんだ。まだまだ完全から、ほど遠いから——。

それに、まだまだ改善の余地があるだけでなく、大きく間違えているところもあるかもしれない——。

本物のニュートンも、自身の研究成果の発表をためらっていたらしいけれど、その気持ち、今、とてもよくわかる気がするんだ」

「——不安なんだね？」似た気持ちを自分も経験していたような気がしていた。

「ああ、不安さ。とっても不安。間違えているかもしれない不安だけでなく、博士号を持っていない不安、きちんとした研究ポストにも就いていない不安もある」

「博士号や研究ポストも、ときに確かに大事だよ。でも、君もよく知っているように——ニュートンは、ペストで学校が閉鎖されて帰郷した奇蹟の2年の間に大きな成果を生んだとき、博士号も研究ポストも持っていなかった。アインシュタインは、奇蹟の年に発表した3つの主要な論文を特許局に勤めながら書いていたとき、博士号も研究ポストも持っていなかった。ついでに僕も、大学生のときの成果を生んだとき、博士号も研究ポストも持っていなかった。

博士号も研究ポストもないからこそ、かえって生み出しやすい成果も、きっと、あるはずなんだよ。大学から離れ、大学のしがらみから解放された自由空間の方が、かえって、生み出しやすい成果も。

それに、博士号 Ph.D、ドクター・オブ・フィロソフィー(Doctor of Philosophy)の肩書きも、ときに大事だけれど、その一方で、ニュートンやアインシュタインのように、フィロソフィーの実践者、最初の一步から自分の頭で考え直す知愛の実践者——フィロソファー(Philosopher)であることも、ときに大事なのさ。

心笑君も、そう思うだろ？」

「——ありがとう。確かに、僕もそう思うよ。

——それで、提案なんだけれど、一緒に連名で公表しないかい？

重力の量子化の説明は、ふたりともが別々の発見者だったのだし、そもそも、君の成果である3ステップス自然知愛が大いに役立っていたのだから」

「——うれしいよ。ありがとう。

でも、それは、おこがましいよ。こっちは、ちょっとした思いつきを、片手間に、ちょこちょこっと細々と試してみただけの話さ。

本物のニュートンのように、統合を果たしながら新しい物理学を体系化し、自然との調和性を高めているのは、まさに、心笑君、君なんだよ。3ステップス自然知愛については、それが役立っていたことを、さらっと触れてくれるだけで、こっちは十分満足だよ。

この各種の統合を含む物理学の新しい体系化、自然との調和性の向上は、まぎれもなく君が誕生させた成果であり、すべて君の業績であるべきなんだよ。

その方が、21世紀のニュートンとして、誰もが納得できることだよ。それに、その方が様になっていてカッコいいよ。

よっ！ 21世紀のニュートン！ 人類の宝だよ！」

名前らしく笑みたたえていた心笑君が、さらに笑顔になった。

## ’16 初夏 (22年9ヶ月後)

それから1年半近く経った頃、心笑君の新しい物理学の体系は、さらに磨き上げられて、ついに公表されるに至った。

“時間が無限でないから”という条件の中の妥協の産物の一面もあったとのことだったが、心笑君らしい見事なフルーツだった。

さまざまな新しい統合が示されていたのみならず、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためにもなるだろう、画期的な応用にたどり着くためのヒントも示されていた。

心笑君は、かつて人類が2000年間地球中心の思い込みにとらわれていたように、これまで人類が300年間エネルギーの永久不滅の思い込みにとらわれていたことを指摘した。

心笑君は、“エネルギー保存則が成り立つからエネルギーは消滅も生成もしない”とは決して言えないことを指摘した。

心笑君は、エネルギーの消滅を、“ニュートンのりんご”ならぬ“ココエのりんご”と象徴的に呼んでもいいような、簡単な実験で実証できることを指摘した。

心笑君は、電荷エネルギーや磁極エネルギーが究極の再生可能エネルギーであること、それらが例えば太陽光のエネルギー源であることも示した。

心笑君は、陽子や中性子といった核子1つの質量エネルギーよりも桁外れに大きい、電子1つの電荷エネルギーや磁極エネルギーから、はるかに安全に桁外れに効率よくエネルギーを引き出せる可能性を示した。

心笑君は、この新しい物理学によって、さまざまな問題を根本的に解消できる可能性があることを指摘した。

...

これらの新しい物理学の成果は、自然科学に革命をもたらすだけでなく、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためにも、健やかに天体生態系社会レベルのライフの一員になるためにも役立ち、多くの人々を喜ばせられるはずだと僕は確信し始めていた。

心笑君は、「これらの成果の一部は、もしかしたら本当にいて何万年何億年も存続しているかもしれない宇宙人にとっては、すでに常識的な内容であるかもよ」とも冗談半分で言っていた。

心笑君は、きっと、多くの人々に祝福されながら、もっともっと幸せになれるだろう。僕は、そう確信し始めていた。

## '16夏 (22年10ヶ月後)

ところが――

予想に反して、専門家やメディアの方々は、心笑君の成果を「科学的でない」「非科学だ」「反科学だ」「科学否定だ」「根拠のない誤科学だ」…というレッテルを貼って否定しただけでなく、心笑君の評判をおとしめて、心笑君を社会的に抹殺した。

専門家やメディアの方々が徹底的に非難し、成果と全く関係のない人格攻撃までも展開しただけでなく、一般の方々までもが同調して、激しい罵詈雑言を浴びせかけた。

「バッカじゃねえの？ エネルギー保存則は、常識中の常識だぜ」

「エネルギー保存則に異議を唱えるなんて、目立ちたがり屋だ。自己顕示欲の塊だ。まともな人間ではない」

「売名行為だ。論文を売るためにでっちあげているのだ」

「そもそも、博士号も研究ポストも持っていないやつは、信用できない。そもそも、博士号も研究ポストも持っていないやつに学問する資格などない」

「エネルギー保存則は、最も普遍的な原理なんだよ。教科書を読めよ。教科書を」

「荒唐無稽のインチキ野郎だ」

「21世紀の大嘘つき野郎だ。世紀の詐欺師、ペテン師だ」

「人類に対する冒涇だ」「人類の汚点だ」「人類の恥だ」「消えろ」

「くたばれ」「クズ野郎」「くそつたれ」「○○○○○」…

――自然 (nature) との調和性を高めようとする知愛の営みそのものと、全く関係ないじゃん。

何よりも、よく確かめることが最優先されるべきじゃん。

本来、“よく確かめてみよう”と提案すべきところじゃん。

誰もが、知愛の営みを実践し始めるべきところじゃん。

それなのに、ただやみくもに、よく確かめないままに、袋だたきにして、消そうとしているだけなんて、奇妙だよ。

――それとも、これが今の科学の現状なの？

――科学っていったい何なの？ ——科学的ってどんな意味？

――博士号や研究ポストもときに大事である一方で、知愛の実践者、フィロソファーとして、自然 (nature) との調和性を高めようとするのも、ときに大事ではないのか？

最初の一歩から考える知愛の営みをする事、フィロソファーであることに、本来、何の資格も不要ではないか？

――知愛を忘れ、放棄し、知愛が生む新たな成果をやみくもに排除することが、逆に信用を失わせるのではないか？

――博士号や研究ポストだけが、これほど重視されているということは、今の科学が、自然 (nature) との調和性を高める、本来の営みをしていないことの証拠なのではないのか？ …

それに――

せっかく、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためになったり、健やかに天体生態系社会レベルのライフの一員になったりするために役立つことをしている超善人であるはずなのに、なぜ、ここまで非難して、よりによって極悪人にする必要があったのだろうか？

全人類の飛躍のためのヒントが、せっかく、つまっているのに、何ゆえに、よく確かめないままに、やみくもに、つぶそうとするの

だろう？

おかしいよ。何かが根本的に、おかしい。

どうかしているよ。何かが根本的に、どうかしている。

ここにある奇妙さは、いったい何なのだろう？

…

## '16夏 (22年10ヶ月3日後)

それだけではない。

専門家やメディアや全社会の方々や一般の方々によって一方的に悪者にされた心笑君は、その悪評に同調する、学校関係者の方々、保護者の方々を含む、身近なの方々によって退職に追い込まれた。

心笑君は生活の糧を失ったのだ。

あんなに優しい心笑君が・・・ ——あんまりだよ。

僕は、電話だけでは心もとなかったので、急遽、彼に直接会うために帰郷した。意外にも、心笑君は、笑みをたたえ続けていた。

「決して絶望しちゃダメだぜ。絶対死んだりなんかしちゃうダメだぜ。誰が何と言おうとも、僕は、心笑君の価値を認めているから」と僕。

「ありがとう。心配してくれて。僕は大丈夫だよ」と心笑君。

僕は、さらに念を押した。「——決して、決して、決して、早まったりなんかしないんだよ。もし、絶望感とか、ユーウツな気持ちに襲われたら、ゆっくり、ゆったり深呼吸することが効くよ。体験的にも実証されているし、自律神経の働きのにも理にかなっている」

「ありがとう。さんぼ君」 心笑君は、さらに心笑んだ。

「いざとなったら、いつでも連絡してくれよ。」

「経済的な支援もできるから」

「ありがとう。」

でも、経済的な支援はいけないよ。君ら、子育て中なんだから。君と瑠音さんの育児の妨げになるなんて、絶対イヤだよ」

「心笑君——」

「アルバイトするなり何なりして、地道に生きるさ。」

もし、それでもダメなら、親の仕事を手伝ったり、実家の家事を手伝ったりしているよ。だから大丈夫だよ」

「でも——」

「さんぼ君、ありがとう。僕は今、とつても幸せなんだ」 名前らしく心笑み続けている心笑君——。「抵抗を受けるということは、それだけインパクトの大きい成果を生み出せたってことなのだからね。これだけ抵抗されるってことは、それだけ、革命的な成果を世の中に誕生させたって、お墨付きをもらえたってことなんだよ」

「——。いや、でも——」

「僕は、今、いつ死んでもいいやって思えるくらい幸せなんだ」

「え？」 ——瑠音の出産後の自分の気持ちがいり返され、さらに、おじいさんのセリフが心に浮かんだ。

「それに—— 人は遅かれ早かれ、いずれ死ぬんだし——」

「——」 おじいさんの手紙の文面が心に浮かんだ。

「いや、だからって、そんなに心配しないでくれよ。大丈夫だよ。君に心底感謝していることは、1ブランク長も揺らがないのだから」

## '16 初秋 (23年後)

ところが——

それからほどなくして、心笑君は、本当に死んでしまったんだ。  
その知らせを地元の親から受けたのは、初秋だった。

音楽イン ♪秋 Autumn

なぜ？ なんで？ 大丈夫だって言ってたじゃないか？

——実際は、それほど、つらかったの？

実際は、どんな言葉であっても不十分で、もっと寄り添い続けるべきだったんじゃないか？

毎日通い続ければよかったんじゃないか？

やっぱり、医者失格だよ——。・・・

——心笑君は、うすうす気づいていたんじゃないか？

こういう状況になる可能性があったことを、はじめから——。

だから、不安で迷っていたんじゃないか？

だからこそ、連名にしようと提案していたのではないか？

——僕は、何てことをしてしまったのだろう。

連名で公表していたら、何かが変わっていたかもしれない。

それに、心笑君が、従来の物理学の常識を踏み外して、こんなふうに社会的に抹殺されるに至ってしまったのは、そもそも、僕の3ステップス自然知愛のせいだ。

全部、僕のせいだ——。

全部、僕のせいで、まだまだ若い心笑君が死んでしまった。

せっかく、まだまだ、これからだったのに—— …

申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

心笑君が不憫で不憫で、いたたまれない気持ちになった。

あんなに優しくかった心笑君が、こんなにひどい仕打ちを受けて、  
しまいには、本当に死んでしまうなんて—— あんまりだよ。

僕は、自分の一部を喪失したような気持ちになった。  
彼の優しさがフラッシュバックした。

「この科学雑誌、よかったら読んでみないかい？」

「女子更衣室で、君が倒れたとき、真っ先に先生に知らせてくれたのは、瑠音さんだったんだよ。水着姿のまま校舎内を走って」

「この間、『北の国から'89 帰郷』で熱烈なファンになったって聞いていたから、準備していたんだ」

「彼女は、そんな子じゃないよ。よく確かめた方がいいよ」

「君たちが、うまくいっていると、周囲も幸せな気持ちになれる。  
そんな、すてきなカップルだよ」

「ありがとう。気持ちは十分に受けとったよ。心の中で大事にさせて  
いただくよ」

「君の成功が心底うれしくて、すぐに購入して、当時から読んで  
たんだよ」

「結構ぼろぼろになってしまったけれど、ぞんざいにあつかったり、  
保存状態が悪かったりしたせいじゃないんだぜ。何度も何度も読み返したからなんだ」

「ありがとう。」

でも、経済的な支援はいけないよ。君ら、子育て中なんだから。  
君と瑠音さんの育児の妨げになるなんて、絶対イヤだよ」

「大丈夫だよ。君に心底感謝していることは、1 プランク長も揺らがないのだから」

…

涙があふれて、あふれて、あふれて…

僕と瑠音は、その晩、ずっと泣き続けた。

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

## '16 初秋 (23年2日後)

葬儀に参列した際、心笑君のご両親が、挨拶にきて、いろいろ説明してくださった。

中学時代からの元々の持病の悪化のせいだったとのことだった。

そんな持病なんてあったの？

なぜ黙っていたの？ 水くさいじゃないか？

落ちこぼれ医者だった僕に気を使って、最後まで、相談しないでいてくれたのかい？

いずれにしても—— 僕のせいで、激烈なストレスを抱えることになってしまい、心笑君の寿命が縮んでしまったよ。

何てことをしてしまったのだらう。

ごめんよ。ごめん。ごめん。

…

心笑君のご両親は、話の最後に、クリッピングされた用紙の束と、彼が書き遺した手紙を渡してくださった。

音楽イン ♪感謝別れ Thank you, See you.

夏岬さんぽ君へ

もしものときのために、手紙を書いておきます。

持病のこと、内緒にしているゴメンよ。

高校時代からずっと、君に余計な心配をかけたくなかったから、いつもと変わらぬ親友でいてほしかったから、どうしても言えませ

んでした。どうか、ゆるしてほしい。

それと、今の医療の限界を、何十年もの間、身にしみて知っていたから、せっかくお医者さんになった君に相談できなかったことも、どうかゆるしてほしい。

本当は、もともと、僕は、こんなに長生きできるはずではありませんでした。実は、高校を卒業できたことも、大学を卒業できたことも、奇蹟だって主治医の先生に言われていたほどだったんだよ。

だから——

君のことだから、きっと、“自分のせいで、早く死んじゃった”とかかと思ってしまうだろうと思うけれど、もうそれ以上、絶対に絶対に、そのように思わないでほしいのです。

決して決して、そうではありません。

全く逆です。

君のおかげで、こんなに長生きできていたのです。

高校を卒業できたのも、

大学を卒業できたのも、

そして、本物のニュートンきながらに自然知愛に没頭できたのも、どれもこれものおかげだったのです。

いつ死んでもおかしくないと思いつつも、こんなに長く充実した人生を歩めていたのは、君のおかげだったのです。

特に、君の学生時代の論文のおかげで、新しい物理学に取り組むことができた時間は、夢見ているように幸せでした。

人生、捨てたものじゃないね。

人生って、こんなに幸せな気持ちになれるんだね。

夢にも思っていないませんでした。

この新しい物理学の探究は、極上のエンターテイメントの1つたりうる、ワクワク感の尽きない自然(nature)のパズル解きでした。

同じような気持ちを、本物のニュートンも味わっていたんだろうなど何度も思っていました。

おかげで、何度も何度も、本物のニュートンの境地を体験できたような気がしていました。おかげで思う存分、物理学を心底エンジョ

イできました。おかげで、夢がかないました。

この極上のパズル解きの楽しみのおかげで、少なくとも、さらに10年以上、寿命がのびていたのは、間違いありません。

さらには、これらの成果を生み出したおかげで、大きな大きな満足感を味わえています。

僕は、君のおかげで、こんなに充実した人生を満喫しながら、長生きできていたのです。

おかげで、寿命を全うできているだけでなく、寿命が最大限に延びて、完全燃焼できた感を味わいながら、大満足できているのです。

だから、もしものときは、寿命延長最高記録更新大往生なのです。だから、本当に本当に、ありがとう。

親友でいてくれて、心から心から、ありがとう。

井束心笑

P.S.

僕の物理学の研究成果、親友への手紙バージョンを、楽しんでもらえたらうれしいです。この中の数学は、ほとんど中学や高校の数学レベルだから、きっと理解できるはずだよ(って書いたら失礼かな)。極上エンターテイメントの1つを体感してもらえたらうれしいです。この楽しさや感動が少しでも広まれば、うれしいです。

それと、完全に時効だと思うから書くけれど、高校時代、瑠音さんのこと、僕も好きだったんだぜ。持病のこともあったし、何より君らの気持ちがわかっていたから、告白どころではなかったけれど。

それでも、瑠音さんの相手が君でよかったって何度も思っていたよ。相手が君だったから、なおさら、高校時代、君らがうまくいっていると、自分のことのように、うれしかった。

近年、君たちが結婚して家庭を築いていることを知り、ますます、自分のことのように、うれしかった。

君らを統合できたことこそが、僕の最高の誇りです。

なんちゃってね(笑)。

音楽終了 ♪感謝別れ Thank you, See you.

彼は、病を乗り越えるべく、新しい物理学に希望をたくして、命を燃やしながらか研究に取り組み続け—— 命懸けで成果を公表していたんだ。

それなのに——。 …

もし、みんなが、よい評価を下して、心笑君を宝にしてくれていたならば、心笑君は、もっともっと長生きできていたのかもしれないのに——。よい出会いに恵まれて、もっともっと幸せを味わっていたのかもしれないのに——。

それなのに——。 それなのに——。 …

いろいろ気づいてあげられなくて、ゴメンよ。

自身の恋心をおさえさせてしまいがちながら、恋のキューピッド役を担わせてしまっていて、ゴメンよ。

——ゴメン。ゴメン。 …

こちらこそ、親友でいてくれて、ありがとう。

心から心から、ありがとう。ありがとう。

…

## '17冬 (23年4ヶ月後) (1)

なぜ心笑君が社会的に抹殺されるに至ったのか、その理由が少しずつわかり始めた——。

音楽イン ♪冬 Winter

その理由の根幹は、一人一人が、よく確かめないままに“例外のないエネルギー保存則”の常識を信じ続けたからだ。

それは、一人一人が、よく確かめようとしないうまま、ただなんとなく“例外のないエネルギー保存則というウワサ”を素直に鵜呑み

にし続けたからだ。

それは、かつて、多くの人々が、よく確かめようとしないうまま、ただなんとなく“地球を中心にして太陽がその周りを回っている”というウワサを素直に鵜呑みにし続けていた状況と似ているのだろう。

それは、かつて、クラスメイトのほとんどが、よく確かめようとしないうまま、ただなんとなく“瑠音が年上の彼氏と付き合っている”というウワサを素直にウワサを鵜呑みにし続けていた状況とも似ているのだろう。

…

そもそも、たとえ専門家やメディアの方々伝える内容であったとしても、たとえ教科書に載っている内容であったとしても、100%正しいとは限らない。

そもそも、あらゆるウワサは、100%正しいとは限らないのだ。なぜなら、人間だから——。人間は、ときに間違えるから——。よく考えてみれば、あたりまえのことだ。

それに、この場合、心笑君が指摘していたエネルギーの消滅は、“ココエのりんご”の実験によって、明確に実証されている。

心笑君が示したように、例えば、りんご、卵、皿…を静かに下ろす過程で、明らかに、エネルギーの一部は完全に消滅している。

落ちついて、よく確かめてみれば、エネルギーの非永久不滅性は、いつでもどこでも簡単に実証できる、明々白々のことだ。

この“例外なくエネルギーが保存しているという考えが自然 (nature) から乖離していること”の実証は、“地球の周りを太陽が回っているという考えが自然 (nature) から乖離していること”の実証よりも、はるかに簡単でもある。

だから、どんなに権威のある専門家やメディアの方々の発言や記

述が根拠であったとしても、どんなに優れた教科書や教師が伝える内容が根拠であったとしても、“例外のないエネルギー保存則”というウワサを、よく確かめないうまま鵜呑みにし続けながら“バツカじゃねえの”と非難していた方こそが実は間違えていたと簡単に実証されているのだ。“地球の周りを太陽が回っている”というウワサを、よく確かめないうまま鵜呑みにし続けながら“バツカじゃねえの”と非難していた方こそが実は間違えていたと実証されているよりも、はるかに簡単に——。

…

それなのに、なぜ、人は、よく確かめようとしないうまま、すべてのウワサが100%正しいと思いつき続けるのだろうか？

専門家の方々言っていたから？ メディアの方々伝えていたから？ 教科書に書いてあったから？ 先生方に教えられたから？ 身近な誰かに教わったから？ …

いずれにせよ、なぜ、人は、自分で、よく確かめようとしなくなっているのだろうか？

なぜ、人は、言葉だけにしばられて、形——自然 (nature) そのものを無視するようになってしまっているのだろうか？

なぜ、人は、よく考えてみなくなっているのだろうか？

なぜ、人は、従来の説と異なる説を、異なるからという理由だけで、排除するようになっているのだろうか？

かつて、ほとんどの人類は、2000年もの間、“地球のまわりを太陽が回っている”と、よく確かめないうまま、よく考えもせず、信じ続けていた。2000年もの間、人類のほとんどが、太陽のまわりを地球が回っているという主張を、よく確かめないうまま、よく考えもせず、ばかげっていると非難し続けていた。

ほとんどの人類は、300年もの間、“エネルギーは永久不滅だ。例外なくエネルギーが保存する”と、よく確かめないまま、よく考えもせずに、信じ続けている。300年もの間、人類のほとんどが、ときにエネルギーが保存しないという主張を、よく確かめないまま、よく考えもせずに、ばかげていると非難し続けている。

ここにある、確かめ放棄、現実無視、思考停止、排他性は、いったい、何が原因で生じているのだろうか？ …

忙しいから？ 疲れているから？ めんどくさいから？ …

いったい、いつまで、人は、知らず知らずに身についた常識にしばらく続け、その常識によって他人をしぼり続けるつもりなのだろうか？

——ここにある営みは、かつて、ガリレオらが繰り広げていた自然 (nature) との調和性を高めるフィロソフィー——知愛の営みから、はるかに遠く離れた、もはや“新しいタイプの宗教”のような営みになってしまっていないだろうか？

“エネルギーの永久不滅性”や“例外のないエネルギー保存則”だけを常識とするべし的な教義を持つ“新しいタイプの宗教”——。

決して“なぜ”と問わずに、さっさと鵜呑みにして慣れるべし的な“新しいタイプの宗教”——

教科書が示す内容を100%丸暗記すべし的な“新しいタイプの宗教”——

つべこべ言わずに、指導者のいうことを素直に聞くべし的な“新しいタイプの宗教”——

よく確かめずに、よく考えずに、ひたすら100%信じるべし的な“新しいタイプの宗教”——

何が言われているか、何がなされているかより、誰が言っている

か、身分や肩書きや資格が何かを重視すべし的な“新しいタイプの宗教”——

だから——決して、単に、忙しさ、疲れ、めんどくささ…と関連している怠慢さだけが原因ではないだろう。

それほど同調圧力が強いことも原因だろう。

それほど主流から外れて異端になることに対して、ビクビクと不安になること、つまり、知らず知らずに個人的にサバイバルするためだけに周囲に流され続けていることも原因だろう。

例えば、天動説が主流だった当時、異端の地動説を主張することができなかった臆病な大人たちの境遇と同じように——。

例えば、『裸の王様』に登場する“王様が裸だ”と言えなかった臆病な大人たちの境遇と同じように——。

——つまり、怠慢だけでなく、臆病さも原因だろう。

♪冬 Winter '17冬 (23年4ヶ月後) (2) に続く

## '17冬 (23年4ヶ月後) (2)

よく確かめようとも、よく考えようともしない怠慢心と、“地球が回っている”“王様が裸だ”と言えなかったような臆病心のせいで、さらに延びえたはずの寿命を心笑君は縮ませられた——。

それだけじゃない。

それらの怠慢心と臆病心のせいで、健やかな全人類レベルのライフが誕生するチャンスが奪われ、健やかに天体生態系社会レベルのライフの一員となるチャンスが奪われ、全人類は、せつかく延びうる寿命を縮ませられ続けているんじゃないだろうか？

だから、この場合、周囲に流され続けていることは、長い目で見れ

ば、自分自身を守り続けることにつながっていないだろう。

…

これじゃ、心笑君がうかばれないだけでなく、全人類がうかばれないよ。

一人一人の心の中にひそんでいる、これらの怠慢さ、臆病さのせいで、このまま、何十年も何百年も何千年も、集団で催眠術にかかったような状態になり続けながら、健全さ、より長い寿命、幸福から遠ざかり続けるのか？

個人個人の怠慢さのせいで、個人個人の臆病さのせいで、みんなして、自然 (nature) から乖離<sup>かいり</sup>した幻想を共有し続けながら、不健全さ、より短い寿命、苦難にしばられ続けるのか？

そんなのつまらなすぎる。そんなの愚かすぎる。

それでも、本当に、賢いホモ・サピエンスなのか？

…

——あわれだよ。

“新しいタイプの宗教”を100%信じ続けている専門家の方々たち。

その専門家の方々の非難を根拠にして100%の非難を繰り返すマスメディアの方々たち。

それらの専門家の方々やメディアの方々の非難に100%同調し続ける一般の方々たち。

それぞれ、“科学的であること”に誇りや自信や確信を持っていたとしても、実際は、“新しいタイプの宗教”を信じさせられ続けているだけ、“新しいタイプの宗教”を布教させられ続けているだけなのに——。

教科書を学び、教科書の内容を伝えるだけでなく、自然 (nature) そのものを直視し、よく確かめ続けながら、よく考えながら教科書

の内容を成熟させ続けることもすればいいのに——。

数式を含む『コトバ』を見て、学び続けることだけでなく、自然 (nature) という『カタチ』も見て、自然 (nature) との調和性を高め続けることもすればいいのに——。

…

自然 (nature) を直視して、よく確かめながら、よく考えながら従来の説明を改善しようとする新説を公言する勤勉で勇敢な存在が、自然 (nature) を無視し続け、よく確かめようとも、よく考えようともしない怠慢な存在、自分さえよければいい、今さえよければいいというサバイバルモード全開になっている臆病な存在によって社会的に抹殺され続けるような世の中——。

勤勉で勇敢な存在の発言を軽視して排除しておきながら、怠慢で臆病な存在の発言だけを重視して素直に鵜呑みにし続けているだけの怠慢で臆病な存在にあふれている世の中——。

イキイキ、ウキウキの方ではなく、ヘトヘト、ビクビクの方を増幅させ合い続けている世の中——。

そんな世の中、絶対、病んでいるよ。

人間レベルのライフが病んでいるだけでなく、人間社会レベルのライフも、全人類レベルのライフも、病んでいる。

そのせいで、健やかな全人類レベルのライフが誕生できず、健やかに天体生態系社会レベルのライフ一員になれないでもいる。

——確かに、僕は、人間レベルのライフの医者としては、落ちこぼれだった。当然、全人類レベルのライフの医者になれる保証なんて、これっぽっちもない。

しかし、それでも、オレは—— それでも、オレは、健やかな全人類レベルのライフを誕生させるべく、健やかに天体生態系社会レ

ベルのライフの一員になるのを助けるべく、全人類レベルのライフの医者になったる！！

全人類レベルのライフの医者として、自然治癒力を引き出して、病を治したる！！

心笑君の想いを、引き継ぎながら――。

心笑君の想いを、活かし続けながら――。

心笑君の想いを、決して無駄にはしない。

…

想いが届け。想いが届け。想いが届け。

広まれ。広まれ。広まれ。

気づけ。気づけ。気づけ。

…

音楽終了 ♪冬 Winter

## ’17春 (23年7ヶ月後)

まず何より重要なことは、一人一人が、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…から、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…へとシフトすることだろう。つまり、一人一人が、元気を取り戻すことだ。

元気を取り戻すために、頭も体も心も健康であることが大事だ。

元気を取り戻すためには、頭脳や骨格筋を使う、適度な活動も、頭脳や骨格筋を休める、適度な休養も大事だ。

元気を取り戻すためには、食事をとることも、ほどよく空腹時間を確保して胃腸を休めることも、それに出すことも大事だ。

元気を取り戻すためには、息を吐くことも、吸うことも大事だ。

元気を取り戻すためには、これらができることが、ミラクルで、ありがたいことなのだと感謝することも役立つだろう。

元気を取り戻すためには、心の底からの“好き、楽しみ、笑い”も役立つだろう。

元気を取り戻すためには、一人一人が、何らかの極上のエンターテイメントの存在に気づくことも役立つだろう。

元気を取り戻すためには、一人一人が、既存の何かを知ったり学んだりする喜びだけでなく、何らかの新発見をしたり新しい何かを創造したりすることの“喜び、快感、心地よさ、達成感、満足感…”を体験することも役立つだろう。

心笑君も、そうであったはずであるように――

こうして、元気を取り戻し、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、楽しみ、心笑、快感、心地よさ、好き、創造性、遊び心、探究心、ウズウズ、やる気、喜び、歓喜、達成感、満足感…にあふれながら、生き続けていれば――

例えば、一人一人が、健やかに、寿命を延ばすことも可能になるだろう。

例えば、自然 (nature) そのものも直視して、よく考えること、“ウワサ”の真偽を、よく確かめることも可能になるだろう。

例えば、自然 (nature) との調和性を高め続ける自然知愛の実践も可能になるだろう。

例えば、“奇妙な古い常識”を克服しながら、“もっともな新しい常識”を活用しながら、より大きな可能性に目を向けることも可能になるだろう。

つまりは、フルーツフルで健やかな自己実現につながるだろう。心笑君のように――。

この結果、健やかな全人類レベルのライフを誕生させること、健やかに天体生態系社会レベルのライフの一員となることのために貢献できるようになるだろう。

だから、一人一人が、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、楽しみ、心笑、快感…にあふれながら、フルーツフルに健やかに生きることを志向し続けることこそが、全人類レベルのライフの自然治癒力の根幹であるはずだ！

この自然治癒力を活性化させることこそが、僕の使命であり、僕自身のイキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、楽しみ、心笑、快感…の源であり、僕の健やかな自己実現――自己フルーツ化、自分らしいフルーツの現出だ。

…

イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、楽しみ、心笑、快感、心地よさ、好き、創造性、遊び心、探究心、ウズウズ、やる気、喜び、歓喜…にあふれられるために、何らかのフルーツも役立つはずだ。

かつて、“おじいちゃんのいちご”が、そうであったように――  
かつて、『北の国から '87 初恋』や『北の国から '89 帰郷』が、そうであったように――

かつて、心笑君フルーツや溜音フルーツが、そうであったように――。

これらのフルーツは、一人一人が“おっくう心、めんどろ心、怠慢心、ヘトヘト、不安、臆病風、ビクビク、クヨクヨ、モンモン、ピリピリ、イライラ、ムカムカ、不快さ、哀しみ…”を克服するためにも役立つし、健やかな全人類レベルのライフを誕生させるため、健やかに天体生態系社会レベルのライフの一員となるためにも役立つ――。

だから、かつて受けとった、さまざまなフルーツを何十倍、何百倍にも増幅させながら――僕は、僕のできることを通じて、自分らしいフルーツを提供し続けよう。

この自身のフルーツも、誰かの、さまざまな形のフルーツの誕生を助けることにつながってほしい。

ニュートンフルーツが、心笑君フルーツをもたらしたように――  
小学校の恩師フルーツが溜音フルーツをもたらしたように――  
心笑君フルーツや溜音フルーツが、僕のフルーツをもたらしただけでなく、新たな誰かのフルーツをもたらすだろうように――。

つまり、あるフルーツが新たなフルーツを生み出すんだ。

ここにあるのは、まさにフルーツの増幅だ。

…

もちろん、ときには、ある程度、慎重になったり、周囲に配慮したり…も大事になるだろう。

だから、ときに、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ、モンモン、ピ

リピリ…を経て、一時的にサバイバルモードを全開にしては、何らかのフルーツのおかげで、なんとか再び、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ…を取り戻すことも、健全だろう。

しかし、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ…を目指すこと、『For』ライフ、“For All Life”路線を志向し続けていることを忘れて、常に、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ、モンモン、ピリピリし続け、年がら年中サバイバルモードを全開にし続けること、『Against』ライフ、Against Life モードをとり続けることがふつうになってしまったり、それを好き好んで志向したり、推奨したりしていれば、病んでいるだろう。

いずれにせよ、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ…を取り戻すことの重要性を思い出すために、心笑君フルーツ——エネルギー保存則の例外の実証は、最適なきっかけの1つになるだろう。

よく確かめること、よく考えることの重要性に気づくためにも、心笑君フルーツ——エネルギー保存則の例外の実証は、最適なきっかけの1つになるだろう。

…

心笑君の発見体験、“ニュートン体験”が、極上のエンターテインメントである自然のパズル解きに目覚めるために役立つのだから。

楽しみが増えたら、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ…へと傾きやすくなるのだから。

イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ…が、フルーツフルで健やかな自己実現を助けることにつながるのだから。

心笑君のように——

絶望を乗り越え続けていた、心笑君のように——

## ’17秋 (24年1ヶ月後)

とある休日——。

「みんな、今から、父さん、実験を始めるよ」 瑠音と、ちびっこたちを前に、僕は言った。「ここに、1つの卵があります。これを約70センチメートルの高さから、静かに、そうっと、フライパンの上に置けば、何が起こるでしょう？」

「何も起きるわけじゃない」「何も起きないよ」

「本当に？」

「本当さ」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」

卵を約70センチメートルの高さから、静かに、そうっと、フライパンの上に置いた。

「ほら、何も起きないじゃん」「やっぱりだ！」

「お、正解だ。その通りだったね。うん。それでは、次の実験に移るよ。もし、この卵を、フライパンの上、約70センチメートルの高さで手を離せば、何が起こるでしょう？」

「ええ！ 卵が割れちゃうよ」

「割れてどうなる？」

「卵の殻が割れて、中身が広がってしまう」「ベチャーとなる」

「本当に？」

「本当に」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」

「あなた——」 瑠音の一声。

「大丈夫。僕が、責任を持つから。 ——では、いくぞ。やるよ。」

えいや！」 パツ、グシャ。 卵の一部がつぶれた。

「あれ、ゆで卵だったの？」

「残念。不正解」

「えー！ ずるいよ」「ずるーい！」

「ずるくない、ずるくない。生卵だなんて、一言も言ってないよ。

つまり、こんなふうに実際に実験してみなきゃわからないことがあるってことさ。それに、ゆで卵であるおかげで、いいことがある」

「どんないいことがあるの？」

「ゆで卵であるおかげで、僕が気持ちよく食べられるってこと——」

——パラ、パラ、パラ… モグモグモグ…。

「もし、生卵で、やってみなければ、やってみてもいいよ」

「あなた——」

「あ、もちろん、責任は、きちんと自分で取るんだよ。

無駄な食品ロスは、父さん、ゆるさないよ。命をいただいているのだからね。

——これで、父さんの実験は、終わりだよ。

あつと、ここで、みんなに問題だ。

卵から手を離したら、卵は割れるのに、卵をそうっと置いたときに、何も起きなかったのは、なぜでしょうか？」

「なんで？」「なぜ？」

「さあ、ぜひ、自分の頭で、よく考えてみよう。

自分の体で感じながら——」

## ’18春 (24年7ヶ月後)

とある休日——。

「父さん、今から、新しい実験を披露するよ」 瑠音と、ちびつこたちを前にして、僕は言った。「ここに、1つのお皿があります。このプラスチックじゃないお皿、陶器のお皿を1.2メートルほどの高さから、静かに、そうっと、床の上に置けば、何が起こるでしょう？」

「何も起きるわけじゃない」「何も起きないよ」

「本当に？」

「本当さ」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」 その皿を1.2メートルほどの高さから、静かに、そうっと、床の上に置いた。

「ほら、何も起きないじゃん」「やっぱりだ！」

「お、正解だ。その通りだったね。

うん。それでは、次の実験——。床の上、1.2メートルほどの高さで、このお皿から手を離せば、何が起こるでしょう？」

「ええ！ お皿が割れちゃうよ」「大きな音が出る！」

「そのあと、どうなる？」

「皿が割れて、バラバラにくだけて、飛び散ってしまう」

「本当に？」

「本当に」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみようか？」

「あなた——」 瑠音の一声。

「わかっている。父さん、ここで、手を離したりなんかしない。

お皿が使えなくなったら、もったいないからね。

でも、実は、5日ほど前に、母さん、誤って手を滑らせて、お皿を床に落としてしまったことがあるんだ」

「え？」と瑠音。

「——母さん、あのとき、何が起きたか説明してくれないかい？」

「あのとき、確かに、ガチャン！って大きな音をたてながら、お皿が大小さまざまな大きさに割れて、飛び散ったわ。2メートル以上遠くに飛び散ったカケラもあったわ。

誰かが踏んづけてケガしないように掃除するのが大変だったから、よく覚えているわ」

「つまり、母さんは、すでに、先取りして実験してくれていたんだ」

「すごい」「すごいね」

みんなで拍手しよう。パチパチパチ…。——照れている瑠音。

「——これで、父さんと母さんの共同実験は、終わりだよ。

あっと、ここで、みんなに問題だ。

お皿から手を離したら割れたのに、お皿をそうっと置いたときに何も起きなかったのは、なぜでしょうか？」

「なんで？」「なぜ？」

「——ぜひ、自分の頭で、よく考えてみてほしい。

想像力をふくらませながら——」

## '18 初冬 (25年3ヶ月後)

とある休日——。

「みんな、今から、父実験をするよ」瑠音と、ちびっこたちを前に、僕は言った。「ここに、1つのスーパーボールがあります。こ

のスーパーボールを約2メートルの高さから、静かに、そうっと、床の上に置けば、何が起ころうでしょう？」

「何も起きるわけじゃない」「何も起きないよ」

「本当に？」

「本当さ」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」

スーパーボールを約2メートルの高さから、静かに、そうっと床の上に置いた。

「ほら、何も起きないじゃん」「やっばりだ！」

「おお、本当だったね。何も起きなかったね。うん。それでは、次の実験に移るよ。もし、このスーパーボールを、床の上、約2メートルの高さで手を離せば、何が起ころうでしょう？」

「簡単だよ。ポーンってばずむよ」「そうはずむ！」

「本当に？」

「本当に」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやってみよう」

手を離すと、スーパーボールは、ポーンと弾んだ。スーパーボールが最高点に到達したタイミングで、僕は、それをキャッチした。

「ほら、はずんだ！」「やっばりだ！」

「お、正解だ。その通りだったね。

これで、父実験は、おしまいです。——そこで、問題。

スーパーボールを手を離したら、ポーンと弾むのに、そうっと置いたときに、何も起きなかったのは、なぜでしょうか？」

「なぜだろう。考えてみるよ」「ゆっくり考えてみるね」

## '19冬(1) (25年5ヶ月後)

とある日の夜、子どもたちが寝静まった後、瑠音とふたりでリビングで会話した。それは、瑠音が投げかけた疑問から始まった。

「ねえ。あの3つの実験は、いったい何を意味していたの？」

「エネルギーの消滅が実証されていることを意味していたのさ」

「えー?! ウソよ。だって、エネルギー保存則があるでしょ？」

エネルギーは種類が変換されるだけで、エネルギーの総量は減りも増えもしない。中学や高校で習うことで、常識中の常識よ。

教科書にも、ちゃんと載っているわ」

「そう。僕にとっても、そのような“例外のないエネルギー保存則”は、常識中の常識だった。物理の試験問題も、その常識のおかげで、正解にたどり着けた。

でも、実際、エネルギーは、ときに完全に消滅するのさ」

「えー? まだ信じられないわ」

「その気持ち、よくわかるよ。僕もそうだったから。ところが——たとえば、まだ信じられなくても、エネルギーが、ときに完全に消滅することを、卵や皿やスーパーボールの、あの簡単な実験が実証してしまっているのさ。

つまり、エネルギー保存則には、例外があったってことなのさ」

「教科書が間違えていたってこと？」

「まあ、そういうことになるね。教科書の中の“この宇宙で、エネルギーは減りも増えもしない”と説明している“例外のないエネルギー保存則”が自然(nature)から乖離かいりしていると明らかに実証されていることになるのだから。

つまり、“例外のないエネルギー保存則”は、結局、これまで、ずっと、誰も、よく確かめようとしてこなかったウワサの1つにすぎなかったってことなのさ。

でも、よく確かめて、よく考えてみれば、ここから新たな自然(nature)のパズル解きを展開できるという意味で、これほどイキイキ、ウキウキ、ワクワクできること、これほど楽しみが膨らむことはない。窮屈な常識を見直して乗り越えた先に、壮大な可能性が広がっているのだから。

——そのことに、はっきり気づかせてくれたのが、心笑君さ」

「心笑君——」

「心笑君にとっても、“例外のないエネルギー保存則”は、常識中の常識だったはずだよ。高校時代に物理でトップの成績をとっていて、大学時代に理学部物理学科に進学していただくくらいだったからね。

つまり、心笑君や瑠音や僕を含めて、みんなにとって、“例外のないエネルギー保存則”は、常識中の常識だった。

だから、静かに物を置く過程なんて、これまで何十億人もの人々が、それぞれに、それこそ何百回何万回と体験していたはずなのに、その過程でエネルギーが消滅していることに、長らく誰も気づくことができなかった」

「——。ねえ、キッチンにいて、何か飲んだり食べたりしてきてもいい？」瑠音は、足早にキッチンにたどり着くと、本当に何かを飲んだり食べたりしたらしかった。

そうして戻ってきた瑠音は、口を開いた。

「ねえ。例えば、親が、赤ちゃんを静かに寝床の上に寝かせようと

している際に、エネルギーを消滅させていることに気づけなかったってことも言える？」

「言える。毎晩、僕らがベッドに横になる際にも、100%脱力してボタン！と倒れていなければ、誰もがエネルギーの一部を消滅させている。それほど身近でありふれている。それなのに、エネルギーの一部を消滅させていることに気づくことは、誰にとっても難しいことだった。みんなが何百回何万回と物が落ちることや月が落ちないことを目撃していたのに、ニュートンが指摘するまで、万有引力の法則に気づくことが、誰にとっても難しかったように——。

でも、その難しいことを成し遂げたのが、心笑君だったのさ」

「すごかったのね。心笑君——」

「ああ、すごかった。だから、心笑君は、少なくとも、そのことだけでも、きっと21世紀のニュートンと呼ぶに値するんだよ。

だから、エネルギーの消滅を実証している3つの実験は、ヘトヘト、ビグビク、クヨクヨ…という病んでいる状態から、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…という健やかな状態への再生の象徴であるだけでなく、古い常識から新しい常識への大転換の象徴でもあり、“ニュートンのりんご”ならぬ“ココエのりんご”とも呼べるよ」

「“ココエのりんご”——」

「そう。それでも、心笑君は、高校の物理教師だったから、なおさら、葛藤していたはずだよ。エネルギーの消滅を簡単に実証できることに気づいていたのに、生徒たちには、“エネルギー保存則が例外なく成立しますよ”と教え続けなければならなかったから——。

でも、最終的に、心笑君は、エネルギーがときに消滅することを

直視することを含め、自然 (nature) との調和性をより高める道、壮大な可能性を広げる道を選んだ。そのせいで、心笑くんは失職してしまっただけでも——」

## ’19冬(2) (25年5ヶ月後)

「おかしいわよ。そんなの。心笑君は、せっかく、自然 (nature) との調和性を高めてくれたり、可能性を広げてくれたり、みんなのためになるはずのことをしていたのに——」と溜音。

「おかしい。天動説を常識として鵜呑みにしている側が、地動説を支持している側を、よく確かめないままに徹底的に排除して冷遇していた時代のように、悲しいほど根本的に、おかしい」と僕。

「ハア—。心笑君、かわいそう」

「そうだね。専門家やメディアは、“ココエのりんご”という実証実験を含む根拠のある心笑君の業績を、よく確かめもせず、よく考えもせずに“根拠のない誤科学だ”と決めつけながら非難し、心笑君を悪者にしていた。エネルギーの消滅について、“ココエのりんご”という実証実験を含む根拠がすでにある以上、そもそも“根拠がない”というレッテル自体の方こそが“誤”なのに——。

それでも、専門家やメディアの方々によって断定的に貼られたこの誤レッテルを、一般の方々は、よく確かめずに素直に鵜呑みにして、よく考えないままに非難に同調してしまい——それが心笑君の社会的な抹殺につながった」

「無邪気に疑わないことが、結果的に、誰かにつらい思いをさせうるのね」

「そうさ。それは、かつてクラスメイトが、君の変なウワサを、よく確かめずに素直に鵜呑みにして信じ続け、よく考えないままに冷たい態度をとってしまったことと同じだよ」

「あれは、その意味で、象徴的な出来事だったのね。」

逆に、よく確かめたり、よく考えたりしていれば、こういった悲劇への加担を回避しうるのね。かつてのあなたのように——。

——ねえ、そもそも、専門家やメディアの方々は、心笑君を、ほめる、賞賛する、宝にする…というあり方も選べたはずじゃない？

それなのに、なぜ、よりによって、心笑君をけなす、攻撃する、悪者にする…というあり方を選んでいったのかしら？」

「そこなんだよ。人は、そもそも、誰に対しても、『For』の方向、『Against』の方向、どちらの方向のあり方も、とることが可能さ。例えば、湯川秀樹やアインシュタインやニュートンに対してさえも、『For』の方向、『Against』の方向、どちらの方向のあり方も、とうとうと思えばとれる。それなのに、なぜ、よりによって、『Against』の方向のあり方だけが心笑君に対して選ばれていたのか？」

「なぜ？」

「病んでいたから。Against Life 病<sup>びょう</sup>という名の病<sup>やまい</sup>——」

「Against Life 病——」

「誰かを悲しませたり、誰かにつらい思いをさせたりを含めて、『Against』の方向の影響を与えるような病さ。この病は、悪気や悪意や故意の有無に関係なく、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨなど原因の種類に関係なく、その言動が結果的にどのような影響をおよぼしているかによって、発症しているかどうかが判断される。

だから、Against Life 病を発症している方々は、たとえ悪気や悪意や故意がなくても、結果的に誰かを悲しませたり、誰かにつらい思いをさせてしまっていることがある。例えば、専門家やメディアの方々だけでなく、専門家やメディアの方々が伝えることを素直に鵜呑みにした一般の方々が、結果的に心笑君につらい思いをさせていたように——。あるいは、例えば、へんなウワサを素直に鵜呑みにしたクラスメイトが、結果的に君につらい思いをさせていたように——」

「——そうね」

「この Against Life 病は、最初は、Against『Out』& For『In』タイプや Against『In』& For『Out』タイプの比較的、軽い症状であったとしても、きちんと対処せず、放置し続け、暴走させ続けていけば、いずれ Against『In』& Against『Out』タイプへ至るような重症の Against All Life 路線に陥ってしまっていることがある。

例えば、放置された自己嫌悪が、他人に投影されて周囲の人間への嫌悪を生じてしまうとか、悪の成敗の名目で他人の危機を放置しすぎたがゆえに、めぐりめぐって自分自身も危機に陥ってしまうとか…を含めて、たとえ正義や道徳を重視していても、知らぬ間に重症の Against All Life 路線に至っていることがありうる。

しかも、いずれにしても、この Against Life 病は伝染しうる。

例えば、Against Life 病を発症している方々が生んだ、誤レッテルや非難…を含むネガティブなウワサを、よく確かめずに素直に鵜呑みにしてまえば、その時点で、僕ら一人一人に Against Life 病が伝染し、僕ら一人一人が Against Life 病を発症していることになる。

たとえ悪気や悪意や故意がなくても、そうてしまえば、その時点で、誰かにつらい思いをさせているのだから」

「だから、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々が Against Life 病を発症している場合、よほど注意していなければ、『カラダ』の方向の方々にも Against Life 病が伝染し、Against Life 病の発症が起きてしまいうるのね？」

「そう。それは、『アタマ』の方向の方々が『Against』を選んでいれば、『カラダ』の方向の方々も『Against』を選びやすいということでもあるのさ。ただし、それは、あくまで『Against』を選びやすいだけの話で、たとえ、『アタマ』の方向の方々が、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…に陥りながら『Against』を選んでいたとしても、『カラダ』の方向の方々が、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…を保ちながら『For』を選ぶことは、決して不可能なことじゃないのさ」

「『Against』の連鎖を断つことができるってことね？ 私のウワサを鵜呑みにしなかった、あなたのように——」

「その通りさ。つまり、『Against』の連鎖を断って『For』を貫くことが、あらゆる方々から、あらゆる方々への Against Life 病の伝染、その発症の広がり、その蔓延を防ぐのさ」

「逆に、『Against』の連鎖を断てなければ、あらゆる方々から、あらゆる方々へ Against Life 病が伝染して、その発症が広がって、それが蔓延してしまうのね？」

「そう。これは、大きな分岐点の1つで、この Against Life 病の伝染、発症の広がり、蔓延は、健やかな全人類レベルのライフが誕生できないままであること、健やかに天体生態系社会レベルのライ

フの一員になれないままであることを示す徴候でもあるんだよ。

なぜなら、そのせいで、多くの人間レベルのライフが、心底やりたいことに思う存分取り組みながら、イキイキ、ウキウキ、ワクワクしながら自分の能力を最高に発揮できないことを含めて、フルーツフルに健やかに自己実現できないままでいるからであり——さらには、そのせいで、人間社会レベルのライフも、全人類レベルのライフも、心笑君が指摘していた“究極の再生可能エネルギー”を十分に健全に活用できないことを含めて、フルーツフルに健やかに自己実現できないままでいるからさ」

「本当に大きな分岐点なのね。——どうしたらいいのかしら」

「少なくとも明確なのは、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々を責めたり非難したり攻撃したりしている場合じゃないってことさ。もし、そんなことをしていたら、自身も Against Life 病を発症させていることになってしまい、その結果、『Against』の連鎖が果てしなく続いてしまいうるのだから」

「そうね。すると、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々の立場がおかしくならないようにしながら Against Life 病の発症を『カラダ』の方向の方々へと広めないための答え、『Against』を連鎖させないための答えを見つけることが大事になるのね？」

「そうさ。さらには、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々の病が治るために応援することも大事になるはずさ。

いずれにしても、みんなを守るべく For All Life 路線を貫き続けるような答え、For All Life 路線こそを広めるような答えを見つけることが、必須条件になるのさ」

## ’19 初夏(1) (25年8ヶ月後～)

専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々が、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…に陥りながら、やむをえず **Against Life** 病を発症させざるをえないつらい立場にあることも理解した上で——『アタマ』の方向の方々と『カラダ』の方向の方々の両方ともを守り続ける、みんなを守り続けるという前提で思索を続けた。

結局——『カラダ』の方向の一般の方々が、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々のことを見守りながら、よく確かめ続け、よく考え続けるしかないのだろうか？

結局は、『カラダ』の方向の一般の方々次第なんだろうか？

『カラダ』の方向の一般の方々が、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々が置かれたしがらみ、呪縛、やむをえなさ、がんじがらめさ…を察してあげながら、そういったことから解放されている可能性の高い『カラダ』の方向の一般の方々の間で、『For』を、For All Life 路線を広め続けるしかないのだろうか？

たとえ専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々がヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…に陥っていても、『カラダ』の方向の一般の方々が、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…を保ち続けていればいいってことなのだろうか？ ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…に陥っている専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々が、どんなに否定しようが、どんなに非難しようが関係なく、『カラダ』の方向の一般の方々が、肯定し、賞賛し、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…を保ち続けていればいいのだろうか？

それとも、専門家やメディアの方々と『アタマ』の方向の方々の改心、再生…に期待してもいいのだろうか？

それとも、専門家やメディアの方々と『アタマ』の方向の方々の改心、再生…には、期待できないのだろうか？

## ’19 初夏(2) (25年8ヶ月後～)

「ねえ、どうして、今、こうなっちゃっているのかしら？」と溜音。「おそらく、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々が、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ、モンモン、ピリピリ…に陥っているせいで“究極の再生可能エネルギーが十分に活用されると困る”と受け止め続けているからだよ。

これは、**Against Life** 病の具体的な症状の1つであり、心笑君に対して、よりによって『**Against**』のあり方が選ばれた理由でもあったらしい」と僕。

「そんな——。——ねえ、そもそも、どうして、専門家やマスメディアを含む『アタマ』の方向の方々は、“究極の再生可能エネルギーが十分に活用されると困る”と受け止めちゃうの？」

「1つは、歯止めが効かなくなるせいで、さまざまなレベルのライフの健康を損なうリスクがあると考えるからだと思うよ」

「どういうこと？」

「例えば、食糧というエネルギー源が無限に存在して、いくらでも好きなだけ食べられるという場면을想像してみてほしいんだ」

「——」 つばをごくりと飲み込む溜音。「——食べすぎたり、暴饮暴食したりして、歯止めが効かなくなって、そのせいで健康を害してしまうリスクがあるね」

「そうさ。“究極の再生可能エネルギー”も同じ。下手すれば、乱

開発、乱造、乱獲、暴走、暴発…を含めて歯止めが効かなくなつて、そのせいで、人間レベルのライフ、人間社会レベルのライフ、地球生態系レベルのライフ…の健康を損なうリスクがあるんだよ」

「——でも、歯止めを効かせて、ほどよく食べ続ければ、ずうっと健康でいられるわ。食糧のことは、もうずっと誰も心配しないですむから、食べるために働くことが不要になる。そうなれば、別の大切なこと、有意義なことに時間やエネルギーを注げるようになるわ」

「そう。“無限の食糧”は、賢く上手に活用できれば、本来、これほどありがたい恵みはない。同様に、“究極の再生可能エネルギー”も、賢く上手に活用できれば、本来、これほどありがたい恵みはない。個人にとってだけでなく、すべてのレベルのライフにとって——。

『アタマ』の方向の方々にとってだけでなく、『カラダ』の方向の方々にとってだけでなく、『アタマ』と『カラダ』の両方の方々にとって——。

つまり、“究極の再生可能エネルギー For All Life”なら、みんなが末永く幸せになれるのさ。“無限の食糧 For All Life”のように「無限の食糧”も、“究極の再生可能エネルギー”も、For All Life 路線で活用できれば、みんなが喜べるのね？」

「そうさ」

「それじゃあ、これで問題解決ね♪」

「ところがどっこい、それは、『アタマ』の方向の方々から見れば、まだ、非現実的なことなんだ」

「なんで？」

「『アタマ』の方向の方々にとって、『カラダ』の方向の多くの方々

が、利己的で、ずるくて、感謝の気持ちを忘れて、衝動を抑制できずに、向こう見ずな愚かな行動をとっているように見えているから。つまり、『カラダ』の方向の多くの方々が Against Life 病を発症しているように見えているから。だから、『アタマ』の方向の方々にとっては『カラダ』の方向の多くの方々が“脅かす存在、不安にさせる存在”にしか見えなくて、Against Life 病を発症してしまうのも、もつともな話ということになるんだよ。だから、今の『アタマ』の方向の方々自身は、『カラダ』の方向のみんなが喜ばば、逆に、脅かされた気持ち、不安な気持ちになってしまうんだよ」

「ちょっと待って。それって、『アタマ』の方向の方々が勝手に自身を投影して、そう見えているだけという可能性もあるのだから、『アタマ』の方向の方々自身の責任である可能性もあるわよね？」

「そうだね。ただし、一方で、『カラダ』の方向の方々にとって、『アタマ』の方向の方々が、利己的で、ずるくて、感謝の気持ちを忘れて、衝動を抑制できずに、向こう見ずな愚かな行動をとっているように見えているというのも、『カラダ』の方向の方々が勝手に自身を投影して、そう見えているだけという可能性もあるのだから、お互い様なんだ」

「——結局、お互いに疑心暗鬼になっているせいで、おかしくなり続けている可能性があるってことね」

「そう。そのせいで、結局、お互いに Against Life 病を発症させ合い続けている可能性があるってことなのさ」

「つまり、それは、結局、『アタマ』の方向の方々と『カラダ』の方向の方々、両方の方々の責任でありうるのね」

「そう。だから、『アタマ』と『カラダ』の両方の方々が、お互いに、どこまでも安心させる存在、お互いに、どこまでも守ってあげる存在になるべく、健やかに再生することが大切になるんだよ。

そうなれば、『アタマ』と『カラダ』の両方の方々が、お互いに、信頼し合いながら、感謝し合いながら、“みんなが喜べば自身も一緒に喜べる存在”に健やかに再生しやすくなる」

「やっぱり、お互い様なのね」

「そう。そうやって、『アタマ』と『カラダ』の両方の方々が、お互いに、みんな一緒に喜び合い続けられるようになれば、“究極の再生可能エネルギー”の十分な健やかな活用も実現する。

これも、大きな分岐点だよ」

「それが実現すれば、『アタマ』と『カラダ』の両方の方々が、素直に、エネルギーが空気のようにありふれていればいいって思えるようになるのね」

「そう。そのことの実現は、みんながみんな Against Life 病を克服できていることの象徴でもあるはずだよ。逆に、“究極の再生可能エネルギー”の十分な健やかな活用が実現できていないことは、Against Life 病の症状が続いていることの象徴でありえて——。

——一般に Against Life 病の症状には、相手の喜びを悲しんだり、相手の悲しみを喜んだりすることが含まれている。

だから、一般に Against Life 病の方々は、周囲の方々に憎まれたり恨まれたり疎まれたりという形で周囲の方々に Against Life 病の発症を促して伝染させ、その結果、ますます自身の Against Life 病が悪化するというように、どこまでも、お互いに連鎖的に発症さ

せ合ったり悪化させ合ったりし続けてしまいうる——」

「Against Life 病を、お互いに発症させ合い続けること、お互いに悪化させ合い続けることは、悲劇よね。

人の喜びも喜んで、好かれたり愛されたりすれば、せっかく、喜びが何十倍にも何百倍にも何千倍にも増幅するのに、もったいなさすぎるわ。逆に、人の喜びを悲しみ、人の悲しみを喜ぶなんて、憎まれたり恨まれたり非難されたり攻撃されたり…を含む受難のリスクを背負うことになるから、<sup>なん</sup>何にもいいことないのに」

「もしかしたら、その受難のリスクをすでに抱えてしまったせいで、恒常的に自分の保身のことで精一杯になっているから、ますますヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…に陥りながら、Against Life 病の症状が悪化し続けているという悪循環——受難のリスクを自分で増やし続けておきながら自身だけの生き残りのために必死にあえぎ続けるという悪循環が出来上がっている例は、多いのかもしれない」

「だとすれば、自分で自分の首をしめ続けている例が多いことになるのね。かわいそう。『アタマ』の方向の方々と『カラダ』の方向の方々も、お互いに Against Life 病が治って、お互いに喜び合えて、みんな一緒に喜べたら最高なのに——」

「そうだね。『アタマ』の方向の方々も『カラダ』の方向の方々も、みんなと一緒に喜び合えるような“健やかな心の再生”を、お互い達成できれば、“究極の再生可能エネルギー”を十分に健やかに活用できるし、健やかな全人類レベルのライフが誕生できるし、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化も果たせるし、健やかな長寿命を満喫できるし、いいことづくめで最高なんだよ」

## ’19初夏(3) (25年8ヶ月後)

「どうしたら達成できるのかしら？」と瑠音。

「例えば、ゆるし合ったり、忘れ合ったりすれば、達成できるだろうさ。『For』を与え合ったり、『For』をゲットし合ったりすれば、達成できるってことなんだけどね」と僕。

「つまり、愛し合えれば、達成できるのね？」

「そうさ。そのためには、きっと、健やかな“頭脳と身体”をヒントにすることが役立つはずだよ。

今の全人類レベルのライフが病んでいる状態は、個体レベルのライフにおける頭脳——『アタマ』の方向の神経細胞社会レベルのライフの総和、頭脳神経系レベルのライフが病みながら、なおかつ、『カラダ』の方向の細胞社会レベルのライフの総和も病んでいる、心身症のような状態と相似であると見なせる。

例えば、せっかくたつぷり存在しているエネルギー源を必要量さえも摂取できなくなってしまっている拒食症のような状態。言い換えれば、頭脳の働きの病的な暴走に伴う過酷な絶食&身体状況の悪化によって生命がおびやかされ続けているような状態さ」

「頭脳が過酷なダイエットを無理に強要し続けているような状態？」

「そう。しかも、そのせいで、頭脳だけでなく、身体までもがおかしくなって、一切の食事が拒絶されてしまっているような状態」

「明らかに、無理しすぎていて、健康を損ねちゃうわよね」

「そうさ。この病んでいる状態は、個体レベルのライフにおける頭脳——『アタマ』の方向の神経細胞社会レベルのライフの総和、頭脳神経系レベルのライフと、『カラダ』の方向の細胞社会レベルのラ

イフの総和が、憎しみ合っている状態でもあるのさ」

「その両者が愛し合う状態になって、病んでいる状態から脱却して、健やかな状態を取り戻すには、どうしたらいいのかしら？」

「心を再生させることさ。そのためには、頭脳の働き方の調整、思考やイメージの調整…を含め、『アタマ』の方向の“ライフのあり方”を改善することと、“ゆっくり、ゆったり深呼吸”、保温、保湿、環境の調整…を含め、『カラダ』の方向の“ライフのあり方”を改善することの両方が大事になる。

だから、頭脳と身体が愛し合う状態になるために求められているのは、本来、頭脳と身体の一部を切除したり、頭脳と身体のどちらかの働きをすべてを止めたりすることじゃない。

つまり、心を再生させるために、頭脳と身体の両方を大事にし続けること、すなわち、『アタマ』&『カラダ』の両方を大事にし続けることが、本来、望まれている王道なのさ」

「その王道によって心を再生させるために、具体的にどうするの？」

「そのためには、まず、病んでいる言葉から健やかな言葉へと『コトバ』を再生させることさ。より具体的には、メモや文書や書物の内容を書き換えたり、話し言葉を言い換えたり、独り言や内言を言い換えたりしながら、例えば、“やせていなければいけない。食べてはダメ。絶食し続けるべきである。苦痛を味わわなければいけない”のような、無理のある言葉、まじめすぎる言葉、厳格すぎる言葉、冷たい言葉、暗い言葉、強迫的な言葉、ヘトヘト疲れさせる言葉、ビクビク不安にさせる言葉、クヨクヨ悩ませる言葉…を含む病んでいる言葉から、“ほどよく曲線的であった方が魅力的だよ。ほどよく

食べていいんだよ。無理に絶食しなくていいんだよ。心地よくなっていい”という優しい言葉、無理のない言葉、ぬくもりのある言葉、明るい言葉、癒す言葉、ユーモアのある言葉、愛情あふれる言葉、イキイキさせる言葉、ウキウキさせる言葉、ワクワクさせる言葉…を含む健やかな言葉へと『コトバ』を再生させるのさ。

つまり、まず大事になることは、Against All Life 路線の言葉から For All Life 路線の言葉へと『コトバ』を再生させることだよ。このことは、誰の言葉か、いつの言葉か、どこの言葉か、どれだけ広く知られた言葉か…よりも、はるかに重要なことなのさ」

「For All Life 路線の『コトバ』であるかどうかこそが最も重要で、Against All Life 路線から For All Life 路線へという『コトバ』の再生が、頭脳と身体を両方を大事にする心の再生の第一歩なのね？」

「そう。この最初のステップ、病んでいる言葉から健やかな言葉への『コトバ』の再生が達成されれば、そのおかげで、病んでいる信念や思い込みも改善されながら、いずれ実際に『アタマ』と『カラダ』の両方のライフが『カタチ』として、病んでいる Against All Life 路線から健やかな For All Life 路線へと向かい、その結果、『アタマ』と『カラダ』の両方のライフが愛し合う状態になり、頭脳と身体を両方を大事にする王道を経て心が再生し、健康が取り戻されるのさ」

「ええ、そうね」

「だから、本来大事なのは、頭脳や身体が互いに、傷つけ合ったり、攻撃し合ったり、痛め合ったりして、『アタマ』と『カラダ』の両方のライフが互いに憎しみ合う状態になることじゃなく、あくまで、頭脳や身体が互いに労り合ったり、守り合ったり、保護し合ったり

して、『アタマ』と『カラダ』の両方のライフが互いに愛し合う状態になることなのさ。頭脳と身体を両方ともが本来必要だから——」

「そうね」

「このように、『コトバ』の再生が『カタチ』として、一人一人の健全な人間レベルのライフの『アタマ』や『カラダ』の両方の愛し合いに基づいた再生につながることをヒントにして実際に活用すれば、健やかな人間社会レベルのライフの『アタマ』や『カラダ』の両方の愛し合いに基づいた再生も、健やかな生態系レベルのライフの『アタマ』や『カラダ』の両方の愛し合いに基づいた再生も、健やかな全人類レベルのライフの『アタマ』や『カラダ』の両方の愛し合いに基づいた誕生も、『アタマ』や『カラダ』の両方の愛し合いに基づいた健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化も、可能になる」

「いずれのレベルにおいても、まずは、『コトバ』の面で、病んでいる Against All Life 路線から健やかな For All Life 路線へと移り、それから、『カタチ』の面から、病んでいる Against All Life 路線から健やかな For All Life 路線へと移ればいいのね？」

「そうさ。つまり、どのレベルにおいても、『コトバ』と『カタチ』、『アタマ』と『カラダ』のすべてにおいて、For All Life 路線を貫けるかどうか、健やかに寿命を全うするための重要なカギとなり続けるのさ。この For All Life 路線を貫けるかどうかこそが、人間レベルのライフや人間社会レベルのライフや生態系レベルのライフが健やかに再生するためにも、将来、健やかな全人類レベルのライフが誕生するためにも、将来、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たすためにも、つまり、あらゆるレベルのあらゆる

存在にとって、大事な分岐点であり続けるのだから」

「そうね♪」

## ’19 初夏 (4) (25年8ヶ月後)

「みんなを守るべく For All Life 路線を貫くためには、1人1人が、ニュートン体験を通じて、そこから広がる壮大な可能性に、イキイキ、ウキウキ、ワクワクすることも役立つと思うよ。

自然 (nature) のパズル解きという極上のエンターテイメントの存在に気づけば、ますます、へトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…こそを育みやすくなるはずだから。かつて、ニュートンの著作『プリンキピア』の登場が、まさに、その自然 (nature) のパズル解きという極上のエンターテイメントの存在に気づききっかけになって、へトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…を育みやすくなっていたはずであるように——。

しかも、この極上のエンターテイメントをきっかけにして“For All Life”路線を貫ければ、ますます、この自然 (nature) のパズル解きを通じた新しい自然科学が十分に発展できるようになる」と僕。

「心笑君の成果を通じて自然 (nature) のパズル解きという極上のエンターテイメントの存在に気づければ、へトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…をより育てて、“For All Life”路線をより貫けるようになるだけでなく、その結果、新しい自然科学も十分に発展しうるのね？」と溜音。

「その通り。心笑君の成果をきっかけにして、壮大な可能性の広が

りにイキイキ、ウキウキ、ワクワクしながら、For All Life 路線をより貫けて、新しい自然科学が十分に発展できれば、人間社会レベルのライフや生態系レベルのライフがより持続しやすくなるし、将来、健やかな全人類レベルのライフが誕生しやすくなるし、将来、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たしやすくなる」

「そっかあ。よかった。いいことづくめね」

## ’19 初冬 (26年3ヶ月後)

さらに、僕は考え続けていた。

もし、新たな自然 (nature) のパズル解きという極上のエンターテイメントのおかげで、へトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…こそを育むこと、For All Life 路線を貫くことが増えてくれれば—— 高校の物理教師の方々も、大学の物理学の専門家の方々も、教科書を書いているの方々も、出版しているの方々も、メディアの方々…も含めて、だれもが助かるだろう。

潔く間違いを認めることが全人類に貢献する立派な行為であると誰もが認識しやすくなるのだから。イキイキ、ウキウキ、ワクワクしながら新たな段階へと、みんなが進みやすくなるのだから。

また、それらのおかげで、もし“究極の再生可能エネルギー”に基づく新たな技術が For All Life 路線で健やかに普及すれば—— エネルギーを利用する方々だけでなく、エネルギーを提供して下さる方々も助かってくるだろう。低コストで格安なエネルギーを供給することに目を向けられるようになるだけでなく、同時に、もっ

と利益を出せるって話になるのだから。

さらには、もし“究極の再生可能エネルギー”に基づく新たな技術が For All Life 路線で健やかに使えるようになれば、例えば――

環境を浄化できるようになったり

淡水を、どこでも十分に確保できるようになったり

砂漠を緑地化できるようになったり

食糧を、どこでも十分に確保できるようになったり

寒冷な地域だろうと、乾燥地域だろうと、どんな気候帯であろうとも、日照不足地域だろうと関係なく、どこにおいても豊かな自然の恵みを十分に享受できるようになったり

大気の組成や温度をうまくコントロールできるようになったり

気候変動をうまくコントロールできるようになったり

石油や石炭の消費に伴う環境悪化への対処を不要にしたり

無理して命懸けで石油や石炭を採掘することを不要にしたり

生態系を十分に守れるようになったり

すべての人類が快適に暮らせるようになったり

燃料や食糧の奪い合いが不要になることで、みんな仲良くできて恒久的な平和がもたらされるようになったり…

つまりは、地球のすべての地を楽園化できることはもとより、その楽園をコピーする技術によって、宇宙や他の天体にも健やかに十分に進出できるようになることを含めて、いいことづくめになる。

その結果、“究極の再生可能エネルギー”に基づく新たな技術を、エネルギー産業に従事する方々が For All Life 路線で健やかに活用して普及することは、健やかな全人類レベルのライフの誕生のため

にも、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化のためにも貢献する立派な行為なのだと、誰もが認識しやすくなる。

つまり、もし、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…を育て、For All Life 路線を貫く方々を増やししながら“究極の再生可能エネルギー”に基づく新たな技術を For All Life 路線で健やかに使えるようになることに貢献できていれば――生態系レベルのライフのため、生態系を構成する存在たちのため、人間社会レベルのライフのため、従来のエネルギー産業に従事する方々のため、消費者の方々のため、『アタマ』の方向の方々のため、『カラダ』の方向の方々のため、健やかな全人類レベルのライフの誕生のため、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化のため…を含め、みんなのために役立っていることになる。

みんなが喜べる For All Life 路線の発展ならば、本物の発展だ！

確かに、新たな何かか誕生するとき、一部の方々にとっては、一時的な痛みがもたらされる可能性がある。

過去において、新たな何かの誕生が、一部の方々にとって、一時的な痛みをもたらしはしていたはずであるように――。

例えば、自動車や電車の誕生、電灯や LED 灯の誕生、冷蔵庫の誕生、CD や DVD の誕生、石油や天然ガスの利用の誕生、工場の機械作り家具の誕生…において、人力車や馬車、ガス灯や提灯やろうそく、天然の氷、レコードやテープで生計を立てていた方々、炭坑夫の方々、建具職人の方々…を含めて、一部の方々にとって、一時的な失業や一時的な生計の苦しさを含め、一時的な痛みとなっていたはずであるように――。

それでも、長い目で見て、それらの一部の方々がその仕事の大変

さから解放されることを含めて、みんなのため、全人類のためになっている、“新たな業種の誕生 For All Life”であったからこそ、これらが実現し、定着したのではないだろうか？

だから、長い目で見て For All Life である新たな業種の誕生に対して、For All Life 路線をとり Against All Life 路線をとらないでくださったこと——その新たな業種を一部の方々が目先の一時的な痛み回避だけのために、ボイコットしたり、阻止したりしないでくださったことに心底感謝するべきだろう。

同様に、新たな自然 (nature) のパズル解きという極上のエンターテイメント、究極の再生可能エネルギーに基づく新たな技術についても、長い目で見て For All Life であっても、一部の方々にとっては、短い目で見て一時的な痛みをもたらす可能性がある。

それでも、もし、新たな自然 (nature) のパズル解きという極上のエンターテイメント、究極の再生可能エネルギーに基づく新たな技術に対し、長い目で見て For All Life であることに気づき、“For All Life”路線をとり Against All Life 路線をとらないでくださったなら——一部の方々が目先の一時的な痛み回避だけのために、ボイコットしたり、阻止したりしないでくださったなら、そのことにも心底感謝するべきだろう。

## ’20 初春 (26年5ヶ月後)

もし、短い目で見て一時的な痛みを抱えざるをえない方も含め、誰もがみんな、長い目で見て、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…を卒業して、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…で生きようになり、For All Life 路線を貫けるようになっていけば、いずれ、全人類レ

ベルのライフの病は治り、健やかな全人類レベルのライフが誕生するだろう。

こうして誕生する健やかな全人類レベルのライフは、健やかに“究極の再生可能エネルギー”を使える存在として、地球生態系のレベルのライフの『アタマ』の方向の存在として活躍しながら、将来、健やかに寿命を全うできるようになっているだろう。そうなっていれば、将来、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化も果たせ、ますます健やかに寿命を全うできるようになるだろう。

ここにたどり着けば——

自然科学や科学技術の問題だけでなく、例えば、教育問題、医療問題、経済問題、人口問題、農業問題、食糧問題、紛争問題…を含む、あらゆる人間社会の問題も、ほぼ必然的に根底から解消しているだろうし、近年のSDGsを含むさまざまな目標も、より効果的に、より健やかに達成されているだろう。

## ’20 初夏 (26年8ヶ月後)

その日の晩、不思議な夢を見た。

「君が、これを考え出したのかい？」 教授は、ぶるぶる震えていた。

「——いいえ、ほとんど井束心笑君です」と僕。

「これだ！ これだよ！ 探し求めていたのはこれだ！

この成果は、物理学に豊かな成熟をもたらします。

この成果は、エネルギー分野にも豊かな成熟をもたらします。

この究極の再生可能エネルギーが健全に活用されれば、エネルギー問題だけでなく、環境問題、水問題、食糧問題も劇的に解消されます。

気候問題さえも、劇的に解消されるでしょう。

争いもなくなる。人類にとって、いいことづくめです。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

私が、生きている間に、このような成果をまのあたりにできて——  
— 私は幸せ者です。みんなも幸せ者です。

この成果は、間違いなく、長い目で見て全人類のためになる。

全人類を笑顔するために役立てることができる——」

おじいさんが笑っている。「うむ。大したもんじゃ」

ランプベリーがしっぽを振っている。

心笑君が笑っている。「君の想いを込めて、それを世の中に広めてみないかい？ 本という形で——」

「え？ 無理だよ。恥ずかしいし、目立ちたくないし、不安だし……」

「だったら、ペンネームにしようよ」と心笑君。

「ペンネーム？」

「そうだな。ペンネームは、“ココエ・サンポ”にしようか？」

「ココエ・サンポ？」

「そう。“ここへ散歩”という意味を持たせられるよ」

「待った、待った。ペンネームは、サンポ・ココエの方がいいんじゃない？ アイザック・ニュートンの名前やアルバート・アインシュタインの名前を見習えば、その方が、きっといいよ。君が先に見つけた成果だから」

「何言ってるんだい？ 君が先に見つけた成果だよ。

ココエ・サンポとなるべきさ」

「いや、ありえないよ。サンポ・ココエとなるべきさ。君が先さ」

「いや。君が先さ」

「いや。そんなことはないよ」

「そんなことはあるよ」

「ないない」

「あるある」

「——って言うか、そもそも、“ここへ散歩”や“散歩ここへ”よりも、“いつかここへ”や“いつも心笑”の方が、はるかに意義深いんじゃない？」 　そもそも案を僕は示した。

「“いつも心笑”で“いつかここへ”—— いいね♪」 心笑君の心笑。

パッと目を覚ました。しばらく、ベッドの上で思いめぐらせた。

・・・ 　いつも心笑で—— 　いつかここへ——。

For All Life の境地、いつもここにいればこそ、いつも心笑でいられる。このおいしい知恵が広まり、みんなに共有されればこそ、健やかな全人類レベルのライフに至る境地、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たす境地へ、いつかたどり着ける。

——でも、不安でないか？ 　恥ずかしいんじゃないか？

心笑君のときと同じように、今度も、あらゆる非難がぶつけられる可能性がある。あるいは、大恥をかく可能性もある。

心笑君のように、さまざまな誤レットを理不尽に貼られる可能性がある。それらの誤レットを一般の方々に鵜呑みにされる可能性もある。 …

しかし—— 　いつかここへたどり着くために、誰かが、今すぐこれをやりとげなければならぬんじゃないか？

——いや、いつかここへたどり着くために、僕は、今すぐこれをやりとげたいんだ！！ 　いつも心笑で、いつかここへ！！

イキイキしていよう。ウキウキしていよう。ワクワクしていよう。

まずは自分自身が For All Life の境地で心笑み続けよう。みんなが For All Life の境地で心笑んでいるミライを想像しながら——。

## '20 初秋 (27年後)

「ダメよ。何も、今あなたがそれをやる必要はないわ」と瑠音。

「そうだろうか？ 今すぐやらないせいで、手遅れにならないだろうか？」と僕。

「——手遅れになる前に、誰かがやってくれるわよ」

「誰かって、誰？」

「それは、はっきり、わからないけれど、どこかのヒーローとか、いつかのライフセイバーとか？ だから、それをやるのは、わざわざ、ここにいる、今のあなたである必要はないわ」

「でも、それは、結局、“自分さえよければいい。今さえよければいい”という気持ちを持ってしまっているってことで、Against Life 病を発症していることを意味しているんじゃないだろうか？」

「——」

「そうやって発症して、誰もが——“どこかの誰かがやってくれるだろう、いつか誰かが救ってくれるだろう”と、知らず知らずにヘトヘトになって、知らず知らずにビクビクして、気づかぬふりをしながら他人事にして自分だけを守り続けていたからこそ、自分の命を惜しみながら“未来のみんなの命より今の自分だけの命”と、めみちちく生き続けていたからこそ、ここまでズルズルと、全人類レベルのライフの病が長引き続けているんじゃないだろうか？」

「——」

「かつて、天動説を鵜呑みにして心底信じていた学者や宗教家たちも、結局、保身しながら自分自身のライフを守っていたせいで、ズルズルと周囲や未来を犠牲にし続けていたわけだし」

「“今の自分のライフを大事にする”のは、きっと本能よ」

「確かに本能もあるかもしれない。でも、実は、本能よりも後天的な学習の方が、ずっと大きいのではないだろうか？」

「——え？」

「小さい無知な頃は、恐れ知らずで、危険なことをしてしまう傾向があるのだから。例えば、道路に飛び出してみたり、熱いやかに手をふれてみたり、ボタン電池やボタン磁石を飲み込んでみたり…」

このことは、“今の自分の命を大事にする”のは、本能よりも学習の方が大きいことを意味しているんじゃないだろうか？

それに、“未来のみんなの命より、今の自分だけの命を大事にし続けよう”をスローガンにし続けているような種だったら、早々と絶滅しているんじゃないだろうか？

例えば、子孫の誕生のために川を懸命に遡上する鮭たち——。

鮭たちは、もし、ずっと自分だけの命を惜しがり続けて、のほとんど海を回避し続けていたら、とっくの昔に絶滅している。

例えば、子孫の誕生のために成虫となるセミたち——。

セミたちは、もし、ずっと自分だけの命を惜しがり続けて、のほとんど幼虫のまま地中で暮らし続けていたら、とっくの昔に絶滅している。

例えば、子孫の誕生のために命懸けで出産する人間の母親たち、両親を始め命を削りながら、育児したり働いて育児を支えたりする人間の保護者たち——。

人間たちは、もし、ずっと自分だけの命を惜しがり続けて、のほとんど怠け続けていたら、とっくの昔に絶滅している。

だから、種の存続のためには、“今の自分の命だけでなく、未来のみんなの命も”を、スローガンにすべきなんじゃないだろうか？

ときには、“今の自分の命より、未来のみんなの命”を優先すべき場面もあったり、ここぞというときのために自分の命を使うべき場面、使命を果たすべき場面もあったりして——」

「そうね。ときには、自身のためよりも、未来のみんなのために優先すべきよ。でも、それは、非常事態に限ったことで、平穏な日常の多くの時間は、向こう見ずに生きて自身を危険にさらすより、自身を守りながら生きている方が長生きできて、のちのちの未来のみんなのために貢献しやすいはずだわ」

「確かに、平穏な日常だったらそうだろうよ。のちのちの、ここぞというときのために温存することも、ときに大事だよ。

しかし、もしかしたら、今すでに非常事態であり続けている可能性、今すでに“ここぞいうとき”である可能性は、ないのだろうか？ 単に麻痺して気づけなくなってしまうだけで——」

「——え？」

「例えば、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々の心笑君に対する異常な反応は、今すでに非常事態であることを証明していないのだろうか？ せっかくの自然 (nature) との調和性を高めている成果、恵みあふれる成果を非難し続けていたのは、なぜ？ 明らかに誤ったままの不毛な言説、不幸や悲しみをもたらす有害な言説を広めることを優先しておきながら——」

「それは——」

「それに、健やかな妊娠や出産のために—— 老化、ある種のスト

レス、ある種の電磁波…がよくないって話、若さ、タイミング、環境、コンディション…が大事だって話、そんなに大事な話を、学校で優先的に教えてくれていなかったのは、なぜなんだろう？ それに比べて、どうでもいいような枝葉末節の知識の山を無理矢理つめ込むことを優先しておきながら——」

「——」

「ここで最も大事なものは、誰かを恨んだり非難したり攻撃したり…を開始して自身が **Against Life** 病を発症してしまわないことだよ。

そのためにも、**Against Life** 病の発症の蔓延、**Against Life** 病の症状の悪化させ合いこそが、このような事態を招いていることに、はっきり気づくことが不可欠なんだ。

具体的には、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々が、ヘトヘト、ビクビクと病み続けているせいだけでなく、その専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々が伝えるウワサだけを、『カラダ』の方向の一般の方々がヘトヘト、ビクビクと病み続けているせいで、よく確かめずに鵜呑みにし、よく考えずに同調し続けている結果、長い目で見て、われわれ一人一人が生きずらい世の中、自身のためにも子孫のためにも生きずらい世の中が存在し続けていることに、はっきり気づくことが必要なんだ。

少なくとも、こういった気づきを広めるためにも、今すでに、使命を果たすべき、ここぞという非常事態であり続けているのではないだろうか？ 今すぐ、誰かが何かをやりとげるべきなんじゃないだろうか？」

「誰かって——」

## ’20秋 (27年1ヶ月後)

「例えば、僕とか——」

「だから、ダメよ。心笑君のように、みんなに非難されて失職したりを含めて、もしものことがあったら、私たちが困るわ。私たちが悲しむ。——それに、For All Life 路線が重要なんでしょ？」

「自分自身や家族も大事にしなきゃ。今無理して自分や家族が犠牲になるのは、正しくないわ。きっと」

「——」

「——無理は禁物よ。あせらないで」

「——そういう態度も、結局は、ビクビクしながら Against Life 病を発症してしまっているってことなんじゃないのだろうか？」

「——え？」

「それに、ときには、思いっきり無理したり、思いっきりあせったりする必要もあるんじゃないだろうか？」

「——それに、のちの人類、未来の人類は、今、無理しなかったこと、あせらなかつたことを納得して受け入れてくれるだろうか？」

「どうして、あのとき、死ぬほど無理して、死ぬほど急いで、勇気を振り絞ってくれなかつたんだって、恨まないだろうか？」

「今、自分らが、ぬくぬくと、のほほんと生き続けているせいで、未来のみんなが犠牲にならないのだろうか？」

「未来のみんな——」

たとえ、疲れていても、不安であっても、たとえ自身が犠牲になっても、健やかな全人類レベルのライフの誕生のために、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化のために、今すぐ、この道を切り開く必要があるのは確かだろう。

今すでに、たとえ命を削りながらでも、たとえ寿命を縮めながらも使命を果たすべき、いや使命を果たしたい、ここぞというときであるのも確かだろう。

手遅れになったら、どうしようもない。

Against Life 病の症状の悪化させ合いのせいで、早々と人類が絶滅したら、しゃれにならない。

そうなったら、悔やんでも悔やみきれないだろう。

ここにあるのは、もしかしたら、数百年数千年間の病んでいる Against All Life 路線のせいで早々とライフが絶滅してしまうか、これからの健やかな For All Life 路線のおかげで、数万年、数十万年、数百万年、数千万年、数億万年…とライフをエンジョイし続けられるかの重大な分岐点であるのかもしれない。

最悪なのは、その怠慢さや臆病さのせいで、長い目で見て、未来のみんなも、愛する家族も犠牲になることだ。

——さんぼよ。

健やかな全人類レベルのライフが誕生する境地、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たす境地—— いつかここへたどり着くのを支えたいだろうか？ 心笑君の汚名を返上して、名誉を挽回させたいだろうか？

それらのためにも、使命を果たしたいんだろ？

…

それに、この道は、長い目で見て、未来のみんなも、愛する家族も守ることにつながっている。

人生において、大事な誰かを守るために、自分を犠牲しなければならぬこともあるんだ。これは、おじいちゃん言葉でもあった。もし自分の命と引き換えに健やかな全人類レベルのライフが誕生し、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化が果たされる

ならば、安いもんだよ。

——確かに、できるだけ長生きしたいよ。

それでも、ときには今を犠牲にしたり、寿命を縮めたりせざるをえないこともあるんだ。

未来のみんな、愛する家族のために——。

例えば、大震災の原発事故のとき、命懸けで、そこにとどまり続けて闘ってくださっていた方々の献身を絶対に忘れちゃいけない。

例えば、大震災のとき、命懸けで、津波からの避難をサポートし続けてくださっていた方々の献身も絶対に忘れちゃいけない。

こういった方々は、今の自分自身がどうなるかよりも、未来のみんな、愛する家族が、どうなるかに、こだわり続けてくれていたんだ。

無謀な自己犠牲だって？ 自分を大事にしるって？

それでも、少なくとも、未来のみんな、愛する家族のためになることを通じて、自分で自分自身の価値を認め続けていけば、ここにあるのは、決して、Against『In』ではなく、For『In』だ。

少なくとも、誰よりも自分のことを知っている自分自身によって自分の価値を認め続けていることが、For『In』の本来の意味であるはずだから。

その意味で、ここにあるのも、For All Life 路線であるはずだ。

...

人は、遅かれ早かれ、いずれ死ぬということ——。

どうせ、いずれ死ぬのだったら、いっそのこと、未来のみんな、愛する家族のためになりながら、そのことに価値を見出しながら、死ねばいいじゃないか？ 少なくとも自分自身で自分の価値を最大限に認め続けてあげながら。だから、“死 For All Life”もありだよ。

そうだよな？ おじいちゃん。

おじいさんの笑顔を心に思い浮かべた。

そうだよな？ 心笑君。

心笑君のレアではなくなっていた笑顔を心に思い浮かべただけでなく—— おじいさんからいただいた形見“アインシュタイン”を、かつて心笑君が握ってくれたように、目をつぶりながら握りしめた。

## ’21 冬 (27年4ヶ月後)

ある人生のあり方へと飛び込む決意を固めた僕は、その決意を溜音に伝えることにした。

「ええ!？」 溜音は、ふるえていた。彼女の目に涙があふれ始めていた。「そんな、あんまりよ」

「健やかな全人類レベルのライフを誕生させるべく、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たすのを助けるべく、全人類レベルのライフの医者として、責任を全うしたい。

心笑君の汚名を返上しながら——」

「——」

「——だから、別れよう」

「——」

「このままであれば、きっと君らにも迷惑をかけてしまう。きっと君らにも恥をかかせてしまう。きっと君らにも嫌な思いをさせてしまう。… 僕らが赤の他人だったら、それらのリスクが減る」

「——」

「そりゃ、さびしいさ。一人になっちゃうのは——。」

それでも、君らに痛みを与えるよりはずっとましさ。それに、誰かに痛みを与えてしまう可能性もある以上、自分自身も痛みを受け入れるべきなのさ」

「ねえ、落ち着いてよ。どうして、そうなっちゃうの？」

もちろん、みんなも大事。全人類も大事よ。

でも、家族も大事でしょ？ あなた自身も大事でしょ？」

「わかるよ。その通りだよ。」

でも、非常事態には、愛する存在、自分以上に大事な存在を守るために、たとえ自身を犠牲にしながらであっても、なんとしても使命を果たす必要も出てくるんだよ。愛する存在、自分以上に大事な存在を守るために、ときには、たとえ自身を犠牲にしても、成し遂げるべきことがあるんだ——。

そうしなきゃ、長い目を見て、未来のみんなも、愛する家族も犠牲になってしまう可能性があるのだから——。

今すぐ誰かが自分事にして本気で取りくまなきゃ、人類の早々とした滅亡を含めて、被害がさらに拡大するリスクがあるのだから。

だから、このまま放置しておくわけにはいかないんだよ。

ここにある病——Against Life 病は、何もせずに先送りにすればするほど、ますます症状を悪化させ合い続けてしまう、そんな、た

ちの悪い性質を持っているんだよ。

誰かが、たとえ命を懸けても、今すぐ、治療を、自然治療を本気で促さなければならぬ、そんな困った病——。 …」

「——」

「君が、命懸けで子どもたちを産んでくれたこと、とっても感謝しているよ。ぶっちゃけ、あのおとき、“自分は、もう、いつ死んでもいいや”って思えるくらい、うれしかったんだ。あのおとき、一瞬でも、そんな気持ちになれたのは、君のおかげだよ。」

今度は、僕の番だよ。

僕にも、命懸けで達成したいこと—— ここぞというときのために命を使いたいこと—— 使命があったってことなんだよ」

「——」

「そりゃあ、僕だって、ぬくぬく長生きしたかったさ。」

おだやかに、君らを見守り続けていたかった。

でも、もう見て見ぬ振り続けているわけにはいかないんだ。

これは、今すぐ誰かがやらなきゃならないことなんだ。

いや、これは、今すぐ僕がやりたいことなんだ。

たとえ、それで自身の寿命が縮むとしても——」

「——」

「もし改善されれば、長い目を見て、未来のみんなのためになるだけでなく、君たち自身のためにもなるはずさ。」

——わかってほしい」

「——何、言ってるの？ 全然わからないわよ」

「溜音——」

「こういうときにこそ、支え合うのが家族じゃない？」

私、言ったよね。

誰が何と言ったって、ずっと味方だよって——

いやよ。絶対別れない」

「溜音——」

「私たちも、たとえ一緒に恥をかき続けることになってもいい。たとえ一緒に嫌な思いをし続けることになってもいい。

だから、最後まで、ずっと一緒にいさせて——」

「——。——ありがとう、溜音。でも、気持ちだけいただくよ。

君は、どうか子どもたちや君自身を守ってあげてほしい」

「私は、子どもたちも、あなたも、両方を守る」

「溜音—— 溜音は、溜音自身と子どもたちを守ってほしい。

犠牲になるのは、僕一人で十分なさ。

でなきゃ、せつかくの僕の犠牲が無駄になってしまうだろう？」

「あなたを犠牲になんかせせないわ」

「僕が、君らを犠牲にさせない」

それから、ふたりは、どちらからともなく抱擁し合った。

そのまま、互いに泣き合いながら——

いつまでも。いつまでも。いつまでも。

## '21 初秋 (28年後)

心笑君を正統に評価する本として、“S. ITSUMO COCOE”のペンネームで、親友からの手紙をメインコンテンツにするという形式で、心笑君に捧げる本として、成果を公表した。

こうして、僕は飛び込んだのだ。すべてを覚悟しながら。

——最初の頃は、完全無視状態だった。

それでも、もしものことを考え、手紙を書いておくことにした。

音楽イン ♪感謝別れ Thank You, See You.

## 溜音へ

この手紙を読んでいるということは、僕の予感が的中したということだね。

それは、とっても、ありがたいことです。

心笑君と僕の成果に、それなりに意味があったということになるのだからね。

確かに、見て見ぬふりしたまま、年を重ねて、ぬくぬく人生を全うするのも、よかったかもしれないね。確かに、そのような人生も魅力的で、それにも価値があったのかもしれないね。

でも、僕は、はるかに、もっと価値のある人生を見つけました。

ヘトヘトに疲れ続けながら、ピクピクと不安を抱き続けながら、クヨクヨ悩みながら、ただ自分だけのために、今だけのために生きる人生よりも—— たとえ寿命が縮んでも、死ぬほどイキイキ、ウキウキ、ワクワクしながら、未来のみんな、愛する家族のためにも、本気で貢献しようとしている人生の方が、はるかに大きな価値を持っていることに、気づきました。

きっと、今の自分にとってだけでなく、10年後、100年後、1000年後、1万年後、10万年後、100万年後、1億年後…のみんなにとっても価値があるのだと——。

そうやって、そのことに価値を見出しながら、たった一度の人生を全うしようと決めたのです。

とにかく健やかな全人類レベルのライフが誕生してほしい。

そして、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たしてほしい。

いつかここへ—— 地球人類もたどり着いてほしい。

病んでいる Against All Life 路線から健やかな For All Life 路線へと舵<sup>かじ</sup>をとり続けながら—— “エネルギー保存則の例外”、“究極の再生可能エネルギー” がもたらす恵みを、健やかに活用しながら——。

そうして、健やかな全人類レベルのライフとして、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員として、より長く持続して、健やかに天寿を全うしてほしい。

瑠音、君のおかげで、毎日、夢を見ているように幸せでした。

君の存在に、君の優しさ、君の愛に、感謝し尽くせないほど感謝しています。

子どもたちのこと、どうかよろしく頼みます。

子どもたちに伝えたいことは、ウェブの作品の中にすべて書いてあります。

どうか、君は、健やかに人生を全うしてほしい。幸せに生きぬいてほしい。

できたら、こんなバカが、この世に存在していたことを、明るく笑い飛ばしながら——。

心から愛しているよ。

これまでも、これからも、ずっと。

ありがとう、じゃあに。

夏岬さんぽ

音楽終了 ♪感謝別れ Thank You, See You.

## ’21 秋 (28年1ヶ月後)

「ねえ」 瑠音が、ふいに不安げな声を上げたのは、本屋さんに向けて、ふたりで歩いているときだった。「あやしいよ。うしろの“犬を連れている、お年寄りの方”」

帽子をかぶってサングラスをかけているお年寄りの方が、犬を連れて 30m ほど後ろを歩いているのが見える——。

「どうして、そう思うんだい？」と僕。

「だって、さっきから、ずっと私たちのあとをついてきている気がするから——」

「——気のせいでないかい？ 僕には、全然あやしく見えないよ。

目の不自由な方が盲導犬を連れているようにも見えるよ。

きっと、たまたまだよ」

「そうかしら——」

「——じゃあ、試しに、次の交差点で右に曲がってみようか」

「そうね」

右に曲がってしばらく歩いて振り返ると、相手も右に曲がった。

「ほらほら」

「——じゃあ、今度は、左に曲がってみよう」

左に曲がってしばらく歩いて振り返ると、相手も左に曲がった。

「ほらほらほら！」

「ええ！？」

「ね？ そうでしょ？」

「私たち、尾行されているのかしら——」

「——尾行！？」

そこで、僕は、念のため、ある提案をした。

「じゃあ、走ってみようか？」

「え？ ——そうね」

僕らは、走り始めた。

すると、なんと、その老人と犬も走り始めた。

「なんで!？」と僕の驚き。

「キャー!」と瑠音の叫び。

何で、むこうも走るんだ!？

「ハア、ハア、ハア、ハア…」 「ハア、ハア、ハア、ハア…」

何十メートル走っただろう？

しばらくすると、犬が解き放たれた。

!!!

犬だけが猛スピードで、近づき始めた。

20m、15m、10m…

「キャー!!!」 「うおー!」

!!!

あまりの驚きのせいで足下がもつれて、うまく走れなくなった。

と思ったら、僕だけ、そのまま地面に転がり、寝そべってしまった。

5m、3m、1m…

「イヤァァー!!!」 「うおおおー!!!」

僕に飛びついた、その犬は——

僕の顔を、ペロペロと、なめ始めた。

よく見ると、ランプベリーだった。

「ランプベリー!」と僕。

「ランプベリー!？」と瑠音。

しばらくすると、お年寄りの方が、近くにたどり着いた。

帽子を取ってから、サングラスを取った。

岬のおじいさんだった。

「おじいちゃん!」

「おじいさま!」

「おう、応援しにきたぞ! 久しぶりじゃのう。

——どうして、逃げるんじゃ?」

「っていうか—— まぎらわしいことしないでくれよ!!!」

——パッと目を覚ました。しばらく呆然とした。

## ’21 秋 (28年2ヶ月後)

その後—— 意外にも、とことん笑われた。

嘲笑的的となって——。

中には、トンデモ理論家として笑う人もいた。

中には、21世紀最大級のジョークやユーモアだと笑う人もいた。

中には、お腹がよじらせ、涙をこぼすくらい笑う人もいた。

…

もう笑うしかない、まともに相手にしない人が多かった。

多くの人は、大笑いして、本気で相手にしなかった。

何が、どこが、そんなに受けたの？

そりゃあ、笑顔を増やすことが自分の夢だったけれど——。

その意味では、夢が叶っているのかもしれないけれど——。

…

## '21 冬 (28年3ヶ月後)

しかし、その後の現実、あのときの海のように過酷だった。

音楽イン ♪冬 Winter

専門家やメディアの方々からのすさまじい反発が始まった。

エネルギーの消滅の簡単な実証——“ココエのりんご”という根拠を完全に無視した“根拠のない誤科学”という誤レッテルが一方的に張られ、ケチョンケチョンに執拗にけなされ始めた。

さらには、成果と全く関係ない人格攻撃もなされ始めた。

恥ずかしがりやなのに“目立ちたがり屋の自己顕示欲の塊だ”と一方的に誤レッテルを貼られ始め—— 損失や犠牲を覚悟して大まじめにやっていたのに関わらず“素人が調子に乗ってふざけすぎている”と一方的に誤レッテルを貼られ始め—— 健全な全人類レベルのライフを誕生させるために、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を助けるために、自然治癒力を引き出すべく健やかな心を再生させようとする全人類レベルのライフの医者であろうとしていたのに関わらず、“落ちこぼれ医者だ”と一方的に誤レッテル、——いや、正しいレッテルが貼られ始めた。

確かに最後のレッテルは正しいけれど—— ……。

いずれにしても、一般の方々、専門家やメディアが伝える正しいレッテルだけでなく誤りのレッテルまでも、よく確かめようとしていないままに<sup>う</sup>の<sup>の</sup>流され始めた。

そのような変化が積み重なり続けた結果、少なくとも S.ITSUMO COCOE は、社会的に完全に抹殺された。

この世では、Against Life 病の症状—— 今の自分の保身だけで精一杯のヘトヘト症状、裸の王様を“裸だ”と指摘できないピクピク症

状が、広く強固に蔓延し続けているということ——。

多くの人が、Against Life 病を、知らず知らずに発症し続け、知らず知らずに互いに悪化させ合い続けているということ——。

こんな僕なんか、全人類レベルのライフの病を治すことなど、どだい無理な話だったんだよ——。

もう、どうしようもないことだったんだよ——。

もう手遅れだったんだよ。

——潔くあきらめよう。その方が、よっぽど楽だよ。

…

それにしても、つまらない世の中だよ。

なんて、つまらない世の中なんだろう。

…

心笑君、ゴメンよ。ダメだったよ。甘かったよ。

どうせ、自分には、無理だったんだよ。

落ちこぼれ医者は、しょせん、どこまでいっても落ちこぼれ医者なんだよ。

…

音楽 ♪冬 Winter '21 冬 (28年3ヶ月2週後)に続く

## '21 冬 (28年3ヶ月2週後)

絶望のどん底にまで沈み、ズタズタになり、仕事も手に着かなくなっていた僕は、冬至に近い日に急遽、無期限の休暇をとり、帰郷する旨を書き記した置き手紙と、念のため、もしものために書いていたあの手紙の微修正版を遺して発ち、雪が積もっている中を歩き続け、なぜか冬の岬の、あの昼寝ポイントにまでたどり着いた。

早々と日が暮れ始め、薄暗くなり始めている——。

真冬の海原が重々しく広がっているのが見える——。

“ゆっくり、ゆったり深呼吸”のおかげで、かろうじて持ちこたえていたけれど—— エネルギーを消耗しきったように感じた僕は、力尽き、そのまま横になった。

雪の冷たさを感じながら、重苦しい雲を見上げた。

そのとき、猛烈な眠気に襲われた。

このまま眠ってしまおうか——。

僕は、ためらいながらも、とりあえず、そのまま目を閉じた。

——不思議な夢を見た。 音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

冬の岬の昼寝ポイントで横になって目を閉じている自分——。

雪の冷たさを全身に感じている自分——。

かと思うと、ほっぺに、ペロペロのぬくもりを感じた。

「——」 ランプベリー——。目が開かない。

「確かに休養は大事じゃが、今の、この状況では、休まない方がよいのではないじゃろうか？」

「——」 おじいちゃん——。目が開かない。

「さんぼ君、起きて。起きるんだよ——」

「——」 心笑くん——。

「君は、決して一人じゃないよ。もちろん、僕らも応援しているけれど、そもそも、僕らの成果も、僕らが知らなかっただけのことで、どこかの先輩方が、とっくの昔に見つけていたことだったのかもしれないんだよ。地球文明の中の誰かって意味においても、地球外文明の中の誰かって意味においても——」

「——」 …… ——コンパースのこと？ 僕は目を開けた。

「それに—— そもそも、究極の再生可能エネルギーは、電荷エネルギーや磁極エネルギーだけじゃないんだよ」

「——」 ??? 目を丸くした僕。

「心のエネルギーも再生するんだよ。何度も何度も——」

「心のエネルギーも再生する——」

「そう。心のエネルギーは、超究極の再生可能エネルギーなんだよ。そのおかげで、僕は何度も何度も絶望を乗り越えることができていたんだ。そのときの希望の源の1つが、君であり、君らだった——」

「心笑君——」

「大丈夫。心は、超究極の再生可能エネルギーだから。」

それは、僕が保証するよ。——というか、これは、まさに、君自身が、すでに示してくれていたことでもあったんだよ。

喜びが何十倍にも何百倍にも増幅できることは、心のエネルギーがくめどもくめども尽きない再生可能<sup>こころ</sup>心エネルギーであることを示唆してくれていたのだから——」

「再生可能<sup>こころ</sup>心エネルギー——」

「そう。君の自己実現は、この意味においても、僕の自己実現の支えであったんだよ。むかしからずっと——

だから、大丈夫。余裕さ。

——だから、今は、もう眠らないんだよ」 心笑君の笑み——。

「その通りじゃ」 なぜかサンタクローズの恰好をしているおじいさんの笑み——。トナカイのかぶり物をしている、しっぽを振りながら寄り添うランプベリーのぬくもり——。

——パッと目を覚ました。

しばらく呆然——。気づいたら、自分も心笑んでいた。

——そうだ。

心笑君のためにも——

おじいちゃんのためにも——

ランプベリーののためにも——

瑠音のためにも——

子どもたちのためにも——

未来の子どもたちのためにも——

未来のみんなのためにも——

今のみんなのためにも——

…

細胞社会レベルのライフのためにも——

人間社会レベルのライフのためにも——

全人類レベルのライフのためにも——

天体生態系社会レベルのライフのためにも——

…

そうやって、心のエネルギーを再生させ、増幅させ続けるんだ。

エネルギーを奪うクヨクヨではなく、エネルギーを増やすワクワクの方こそを膨らませながら——。

ワクワクワク♪ ワクワクワク♪

ワクワクワクワク ワクワクワク♪

「あそれ♪

ワクワクワク♪ ワクワクワク♪

ワクワクワクワク ワクワクワク♪

あそれ♪

ワクワクワク♪ ワクワクワク♪

ワクワクワクワク ワクワクワク♪」

——イキイキイキ♪ イキイキイキ♪

イキイキイキイキ イキイキイキ♪

——アイアイアイ♪ アイアイアイ♪

アイアイアイアイ アイアイアイ♪

——ランランラン♪ ランランラン♪

ランランランラン ランプベリー♪

——ルンルンルン♪ ルンルンルン♪

ルンルンルンルン ルンルンルネ♪

——ニコニコニコ♪ ニコニコニコ♪

ニコニコニコニコ ニコニココエ♪

——サンサンサン♪ サンサンサン♪

サンサンサンサン サンサンクス♪

——ルンルンルネ♪ ルンルンルネ♪

ルンルンルネサン ルネサンクス♪

——ニコニココエ♪ ニコニココエ♪

ニココエサンクス ココエサンクス♪

——ルネサンクス♪ ルネサンクス♪

ルネサンクスクス ルネサンクス♪

——サンクスクス♪ サンクスクス♪

サンサンクスクス サンクスクス♪

… ——おじいちゃん、いつか笑い飛ばせるときが来るよね。

——いや、今すぐ、笑い飛ばしちゃおうか。

「フフフッ。フフフッ。アッハッハッ。アッハッハッ。

アッハッハッハッハッ。アッハッハッハッハッ！ …」

心の元気を取り戻せれば、この理不尽な世の中をもたらししている病んでいる方々のために何ができるかに想いを馳せられる。

Against Life 病が治るには、どうしたらいいのだろう？

まずは、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ、モンモン、ピリピリ…から解放させてあげて、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ…してもらおうことだ。そうやって、まず心が元気になってもらうことだ。

心が元気になってもらえれば、その上で For All Life 路線を健やかに実現してもらおうことができる。

…

そこには、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、心笑、喜び、快感、楽しみ…を含む『For』の再生や増幅がある。

イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、心笑、喜び、快感、楽しみ…を含む心のエネルギーは、いくらでも増幅できるし、何度だって再生できる。

夢の中の心笑君が言っていたように、それらは、たとえ、どんなに絶望しても、何度も何度も再生できる超究極の再生可能エネルギー、再生可能心エネルギーでもあるから。

人間は、本来、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、心笑、喜び、快感、楽しみ…にあふれている健やかな存在であるはずだ。だから、それは改心などではなく、まさに心の再生だろう。

一人一人が心の再生を実現するにはどうしたらいいのだろう？

そのためには、一人一人が好き、楽しみ、心笑…を取り戻し、それらをエンジョイすることが有効だろう。

当然、好き、楽しみ、心笑…には、個人差があるだろう。

基本的に、心底好きなことをするなり、心底楽しめることをするなり、心底笑えることをするなり…自由にやればいい。

もちろん、周囲と調和させながら——。

周囲のみんなも喜ばせながら、周囲のみんなも楽しませながら。

そうすれば、一人一人が Against Life 路線を脱しながら、For All Life 路線をとり続けることができるし、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ、モンモン、ピリピリ、イライラ、ムカムカ…の苦しみライフを脱しながら、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、アイアイ、ルンルン、ユウユウ…のお楽しみライフを育て続けられるし、心の再生——心の回復、復旧、復興、全快…を実現できる。

この心の再生——心の回復、復旧、復興、全快…の実現が広がれば、人間レベルのライフの健康寿命が延びるだけでなく、人間社会レベルのライフの健康寿命も延びる。

心の再生が広がり続けられれば、いずれ、健やかな全人類レベルのライフも誕生するし、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化も果たせる。

そうなれば、科学技術が十分に健やかに育ち、地球環境の持続、生態系の繁栄に貢献できるし、生態系からも重宝され続けるだろう。

だから、心の再生——心の回復、復旧、復興、全快…の実現が広まるのが最優先なのだろう。

心の再生が広まるには『For』の連鎖が広まることも大事だろう。

心の再生が広まるには、For All Life の知恵が広まること、For All Life の『コトバ』が広まることも大事だろう。

心の再生が広まるには、『アタマ』と『カラダ』の両方の方々が愛し合うこと、For All Life 路線を高め合うことも大事だろう。人間レベルのライフにおいても、人間社会レベルのライフにおいても、将来の健やかな全人類レベルのライフにおいても…。

心の再生が広まるには、“『イマ』と『ミライ』”の両方の方々が

愛し合うこと、For All Life 路線を高め合うことも大事だろう。

心の再生が広まるには、一人一人が、フルーツフルで健やかな自己実現 For All Life を果たし続けることも大事だろう。

…

心の再生が広まれば、たとえ一人一人のエネルギーは小さくても、トータルで大きなエネルギーになるだろう。

心の再生が広まれば、たとえ一人一人が微力であっても、トータルで大きな力が生まれるだろう。

この大きな力こそが、全人類レベルのライフにおける自然治癒力の根幹だろう。

この自然治癒力が大きくなれば、ますます心の再生が広まり——心の再生が広まれば、ますます自然治癒力が大きくなるだろう。

それが十分に育てば、全人類レベルのライフは、健康を獲得でき、健やかな全人類レベルのライフが誕生するし、いつしか健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たせるんだ。

全人類レベルのライフは、いつかここへ、たどり着けるんだ。

…

ああ、たまらんぜ。

ああ、お楽しみ袋がふくらむぜ。

…

そのためにも、まずは、自分自身が好き、楽しみ、心笑…を取り戻し、エンジョイし続けよう。周囲のみんなも喜ばせ、楽しませながら——。For All Life 路線を貫きながら——。

そうして、まず自分自身が、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ、モンモン、ピリピリ、イライラ、ムカムカ…を脱し続け、ウキウキ、イキイキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、アイアイ、ルンルン、

ユウユウ…へと舵をとり続けよう。

何度も、何度も、何度も…。

そうしながら、日々、心の再生——心の回復、復旧、復興、全快…を繰り返し実現し続けよう。

何度も、何度も…。どんなに絶望しても。何度絶望しても。…

心は、超究極の再生可能エネルギーだから。

——そうだよな？ 心笑君。

——そうだよな？ おじいちゃん。

——そうだよな？ ランプベリー。

——そうだよな？ 瑠音。

——そうだよな？ みんな。

…

気づけ！ 気づけ！ 気づけ！

目覚めろ！ 目覚めろ！ 目覚めろ！

広まれ！ 広まれ！ 広まれ！

いつまでも、いつまでも、いつまでも！

どこまでも、どこまでも、どこまでも！

プリーズ、プリーズ、プリーズ！

…

雪の勢いが増していた。——とにかく帰ろう。早く連絡しなきゃ。よろよろと立ち上がった。すると、「あなた！」大きな声が響いた。見ると、懐中電灯を持っている瑠音がそこに立っていた。

「よかった——」 瑠音の声は、ふるえていた。涙をぼろぼろと、こぼし続けている瑠音。僕は、駆け寄ると、思わず抱きしめた。「ごめん。死んじゃったと思ったかい？」

「だって—— だって—— こんなに寒い中、眠ったりしたら——」  
 「考えごとをしていたんだよ。確かに最初は眠ってしまって夢を見たけれど、途中から、ずっと考えごとをしていたんだ。おかげで」  
 「バカ、バカ、バカ——」 瑠音は、僕の胴体を、両手でポンポンたたいた—— あとに抱きしめた。  
 「——愛してる。愛してる。愛してる」 僕は、より強く抱きしめた。

## '21 冬 (28年3ヶ月2週1日後)

その翌日は、お昼頃まで、実家のベッドの上で横になっていた。  
 ふいに、フワリフワリと浮かぶコンパースの存在に気づいた。  
 「お久しぶりで、ございますう♪」 コンパースの第一声。  
 「おお、久しぶり——」  
 「ご一緒に、はるかなる旅にでかけませんかあ〜♪」  
 「はるかなる旅? ——」  
 「そうですともお♪」 コンパースは、ひとまわり拡大して、僕がその上に乗るのを促した。  
 僕は、この際どうにでもなれと半ばやけくそで、素直にコンパースの上に四つん這いになった。  
 「しっかりつかまっているのでございますよお♪」 そう言うや否や、開いている窓から飛び出した。  
 「う〜、わっ!!!」  
 音楽イン♪ Soaring Up Into The Sky 途中から  
 家の外に出たコンパースは、まもなく、上へ上へと上昇し始めた。  
 家が遠ざかる、公園も遠ざかる、森も遠ざかる、川も遠ざかる、砂浜も、岬も、海も、陸地も…遠ざかる。

さすがに不安になってきた。もし、ここから落ちたりしたら…  
 「いったい、いつまで昇り続けるんだい? ——大丈夫?」  
 「大丈夫でございますよお♪」 さらに遠ざかり続けるコンパース。  
 地球の丸みがどんどん増し続け、とうとう、まん丸い、美しい青くて白い地球全体が視覚に入った。  
 太陽を背にして見える、青く白い地球——。  
 息をのむような美しさだった。  
 音楽フェード・アウト♪ Soaring Up Into The Sky  
 体重が感じられなくなり、体がフワリフワリしている——。コンパースとほぼ接せずとも、落下する不安はすっかり消え失せていた。  
 「——あれ、空気は? 僕の呼吸は?」  
 「大丈夫でございますよお♪」  
 「私たちもいるわよ♪」 コンパリーチェの登場。合計2枚。  
 「私たちもいるからね♪」 元コンパルンクルの登場。合計3枚。  
 「私たちもいるでござす」 元コンパランクルの登場。合計4枚。  
 「私たちもいますからね♪」 元コンパリンクルの登場。合計5枚。  
 「私たちもいるじえーい♪」 元コンパロンクルの登場。合計6枚。  
 「私たちもいますよ♪」 元コンパレンクルの登場。合計7枚。  
 7枚のペーパーコンパースが登場したかと思うとみんなが互いに部分的に重ね合わさり、僕を美しい繭まゆのように包み込んだ。その中で呼吸できると安心したのもつかのま、それらは、透明になった。  
 ——すると、僕の衣服も身体もすべてが透明になった。???  
 地球のはるか上空で呆然としていると——  
 「はるかなる旅は、ここから始まるのですう〜♪」 コンパースが声を響かせた。

音楽イン♪ Soaring Up Into The Sky途中から

「ええ!？」 僕の声も響いた。

さらに遠ざかると、太陽光に照らされている月が見えてきた。

地球と月と太陽から遠ざかり続けると、ほかの惑星たちも見えてきて、太陽系全体が視界に入った。

「太陽系だ——」 思わず、つぶやいた。

さらに太陽系から遠ざかると、太陽系が1つの輝く点として見えるほどになった。

さらに遠ざかると、別の光る恒星がいくつか目に入った。

この1つ1つの輝く点が、それぞれに、いくつかの惑星を抱えているのだろう。太陽系のように——。

さらに遠ざかり続けると、どれが太陽系か全く見分けがつかなくなるほどの無数の輝く恒星が目に入るようになった。

「天の川——」

さらに遠ざかると、銀河系全体が渦を巻いているのが見えた。

「すげえ。銀河系の渦だ——」

この無数の輝く点々の中のたった1つが太陽系なのかあ。

さらに遠ざかり続けると、となりのアンドロメダ銀河が見えた。

かと思うと、局所銀河群が見えた。

さらに遠ざかり続けると、超銀河団が見えた。

このとき、銀河系は、すでに1つの輝く点に見えるほどになっており、どれが銀河系か見分けがつかなくなっていた。

「すごすぎる——」 この無数の輝く点の中の1つ1つが銀河系に匹敵する存在なのかあ。 …

さらに遠ざかり続けると、巨大な泡のような宇宙の大規模構造が見えてきた。

さらに遠ざかり続けると、とうとう宇宙の大規模構造さえ小さな1つの輝く点に見えるほどの辺境の地、宇宙の果ての果ての果てまでたどり着いた。

音楽フェード・アウト♪ Soaring Up Into The Sky

その唯一の輝く点以外は、すべてが真っ暗闇だった。

「コンパース——」

「なんでございましょうか♪」

「さすがに遠ざかりすぎじゃない? もし、このまま遠ざかり続けて、あの輝きが見えなくなったら、一体どうなるの?」

「そうでございますねえ♪ あらゆる方向がすべて、完全に真っ暗闇になってしまうのでございませう♪」

「完全に真っ暗闇? そうなったら、どうなるの?」

「帰れなくなってしまうのです♪」

「——ええ!？」 …… 「帰れなくなったらどうなるの?♪」

「われわれは、永久に、この真っ暗闇の中で漂い続けるのです♪」

自由空間は果てしなく広がり、自由時間も限りなく延びるのでございませう♪ 実際、時間の流れが永遠に止まってしまったかのようになってしまうのです♪」

「暇で暇でしかたなくなってしまうじゃん」 …… 「——だったら、あの輝きは絶対に見失っちゃダメじゃん」

「その通りなのでございませう♪ ですので、今のところ、あの輝きが見える範囲にとどまり続けているのでございませう♪」

「今のところ?」

「もし、あなた様が、お望みになるのならば、見失うこともできる  
のでございますよお♪」

「そんな——。そんなこと、望むわけないじゃん——」

何なんだろう、この気持ち——。このモヤモヤした気持ち——。

しばらくの間、このモヤモヤした気持ちを整理し続けた。

はるか彼方の、あの輝きの一点の中の奥の奥の、さらなる奥の中  
にある銀河系の渦の中のごく一点である太陽系の中の地球上で、僕  
は暮らしていた。

さんざん、失敗して、イヤな思いをして、傷ついて、打ちひしが  
れて、苦しんで、せつなくなつて、つらくなつて、悲しくなつて…。

ところが、今は、そんなしんどさが皆無な、はるか彼方の辺境の  
場で、限りない自由空間と、限りない自由時間を手に入れることが  
できそうになっている。

いっそのこと、何もかも、あらゆるしがらみから解放されて、こ  
のままとどまり続けてしまおうか？

永遠の時間の中で——。どこまでも果てしない空間の中で——。

限りない自由の中で——。

でも——

退屈で退屈でしかたない暇あふれる永遠の自由時間に意味がある  
のだろうか？

——“有限の自由時間”と引き換えに、僕らは、飽きることのない  
地球で生きていたってことなのだろうか？

バラエティあふれる楽しみに満ちた地球で——。

さまざまな喜びにあふれている地球で——。

いろいろな輝きにあふれている地球で——。

… ——丸みを帯びた地球の輝き、溜音と見た海面の輝き、ラン  
ブベリーと見た川面の輝き、おじいさんの相棒であった丸い石“ア  
インシュタイン”の輝き…が心に浮かんだ。

どれくらいの時間が経ったのだろう。コンパスが口を開いた。

「これから、どこへ行きたいでしょうかあ？」

「え？ ——って、どこへも行けるの？」

「どの銀河団へも、どの銀河へも、どの恒星系へも、どの惑星へも  
…どこへも行けるのですう♪

自由に選ぶことができるのでございますよお♪

地球より、はるかに平和で住みやすい快適な惑星、地球より、は  
るかに大勢の、心健やかな仲間が住んでいる場所が、無数にあるの  
でございますよお♪」

「無数に——」 ……

「その中の1つで暮らせば、地球で暮らすより、はるかに快適に」

「地球へ帰りたい。——地球へ帰郷したい」

「なぜなのでございましょうかあ～♪」

「地球がわが家だから。地球がマイホームプラネットだからだよ。

そうして、故郷の地球で生きている大好きな家族——僕の小さな  
家族はもちろん、地球というでっかな家で暮らす大きな1つの家族  
と一緒に、地球を、宇宙一健やかに暮らせる、宇宙一快適な場所に  
したいから。みんな一緒に力を合わせて、健やかな全人類レベルの  
ライフを誕生させながら——。健やかな天体生態系社会レベルのラ  
イフの一員化を果たしながら——。何億倍も何兆倍も、うれしさを

感じながら——」

「——ほういほういほうい～♪ かしこまりましたですう～♪」

それから、逆向きのズームインする旅、帰郷の旅が始まった。

母なる宇宙の大規模構造。

母なる超銀河団。

母なる局所銀河群。

母なる銀河系の渦。

母なる太陽系。

母なる地球。

太陽を背にフワフワ浮かびながら、白と青に包まれた美しい地球、マイホームプラネット全体を眺められるポイントにたどり着いた。

コンパースらは、ここで、しばらく静止した。

すると、いつしか、身体も衣服も、色を取り戻した。

コンパースたちも、いつしか色を取り戻し、繭の形を解いて、7枚に分離し、それぞれ自由になった。

「ただいまですう～♪」「ただいまあ～♪」「ただいまだね♪」

「ただいまでごわす」「ただいまですね♪」「ただいまだじえーい♪」

「ただいまですよ♪」

それから、7枚は完全に重ね合わさり1枚になった。僕が、その上に四つん這いになると、「それでは、参るでございますう～♪」

コンパースは、下へ下へと、ゆっくりゆっくり降下し始めた。

かつての悪夢とは対照的に——。 ああ、いい夢だなあ。

“ココエのりんご”の新たな実証実験をしているかのように——。

雲、海、陸地… 岬、砂浜、森、川、公園、家々… そして、つい

に実家、自分の部屋へと帰ってきた。——そこで、コンパースから降り、あいさつを交すと、そのままベッドの上に静かに横たわった。

——かと思うと目覚めた。コンパースは、どこにもいなかった。

しばらく呆然とした。

どこまでが現実で、どこまでが夢なのか、そんなことは、もう、どうでもよくなっていた。

夢であろうと想像であろうと思考であろうと空想であろうとファンタジーであろうと… ——何であろうとも、『アタマ』の方向にあるはずの“それ”から何かを学べることは確かだろう。

“それ”が何であろうが、もう関係ない。

広い広い宇宙の中に、せまいせまい地球が存在していること——。

長い長い宇宙の時間の流れにおいて、短い短い一人一人の人間の一生、それこそ“たまゆら”な一生が繰り返らされていること——。

これらは、ゆるぎない事実だ。

広大な宇宙空間にある、狭小なオアシスである地球を、互いに争い続ける場として浪費することが、どんなに愚かなことか——。

悠久の宇宙時間における、せつかくの瞬間のきらめきである一生を、互いに争い続ける機会として浪費することが、どんなにバカげたことであるか——。

もったいない。もったいなさすぎるよ。 …

どうせなら、喜びや楽しみ、心地よさや快感…が、何十倍何百倍、いや、何千倍何万倍、何億倍何兆倍…にも増幅することのためにこそ—— このかけがえのない空間や時間を使いたいよ。 …

Against All Life 路線を脱して、For All Life 路線を貫いていたい

よ。Against All Life 路線を脱して、For All Life 路線こそを貫いてほしいよ。

For All Life の境地、いつもここから始めていれば、社会人のときの心笑君のように、いつも心笑をたたえ続けられる。

For All Life の境地が広まり続ければ、健やかな全人類レベルのライフが誕生し、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化が果たされる境地へ、いつかここへ地球人類もたどり着ける。

音楽イン♪いつかここへ Someday Here

いつもここから、いつも心笑！

いつもここから、いつも心笑！

いつもここから、いつも心笑！

いつもここから！  
いつも心笑！

いつもここから！  
いつも心笑！

いつもここから！  
いつも心笑！

いつも心笑をたたえられる、For All Life の境地が広まり続ければ、病んでいる者へも 健やかなる者へも  
未熟な者へも 成熟している者へも  
心貧しき者へも 心豊かな者へも

持たざる者へも 持っている者へも

男性へも 女性へも

子どもたちへも 大人たちへも お年寄りたちへも

苦労多き者へも 安らぎ多き者へも

悲しみ多き者へも 楽しみ多き者へも

悲観的な者へも 楽観的な者へも

えらくない者へも えらい者へも

アマチュアな者へも プロフェッショナルな者へも

フォロワー的な者へも リーダー的な者へも

『カラダ』的な者へも 『アタマ』的な者へも

『イマ』を生活している者へも

『ミライ』を生きる者へも 『カコ』をきた者へも

…

いつも心笑をたたえられる、For All Life の境地が広まり続ければ、いつか、健やかな全人類レベルのライフが誕生する境地——  
いつか、健やかな天体生態系社会のライフの一員化を果たす境地——  
いつかここへ、たどり着けるんだ。

いつもニコニコ心笑を生む、For All Life の境地が広まり続ければ、みんなに共有され続ければ—— いつかここへたどり着けるんだ。

For All Life の境地が広まり続けて  
健やかな全人類レベルのライフへ！

For All Life の境地が広まり続けて、健やかな  
天体生態系社会レベルのライフの一員化へ！

For All Life の境地が広まり続けて、  
いつかここへ！

いつも心笑が広まり続けて、いつかここへ！

For All Life！ いつもここから！ いつも心笑！  
みんなに広がり続け！ いつかここへ！

For All Life！ いつもここから！ いつも心笑！  
みんなに広がり続け！ いつかここへ！

For All Life！ いつもここから！ いつも心笑！  
みんなに広がり続け！ いつかここへ！

...

音楽終了♪いつかここへ Someday Here

## それから何年も後の初夏(1)(何十年も後)

帰郷の際の散歩がてら、あの地球のかすかな丸みがわかる岬に久々に一人で来ていた。座りながら思った。僕は、地球人だ——。

いや、それだけでない。僕は、宇宙人でもある——。

「わしゃあ、宇宙人じゃからのお」 おじいちゃんは、そうとも話していたっけ——。

もちろん、“地球人だからいい”とか“宇宙人だからいい”とも、逆に、“地球人だからわるい”とか“宇宙人だからわるい”とも、そう単純には言えないだろう。

そうだ。一般に、“〇〇人だからいい”とも、“〇〇人だからわるい”とも、そう単純には、本来、決して言えないはずなのだ。

宇宙人や地球人を含む、あらゆる〇〇人は、〇〇人 For All Life であり続ければこそ、よき存在なのだ。なぜなら、For All Life の境地であり続ければこそ、あらゆる存在は、愛し合い続けながら感謝し合い続けながら共に繁栄しながら共に存続し合えるのだから。

逆に、〇〇人 Against All Life であり続ければ、宇宙人や地球人を含めて、あらゆる〇〇人は、あしき存在なのだ。Against All Life の境地であり続ければ、あらゆる存在は、憎み合い続けながら攻撃し合い続けながら、いずれ共に衰退しながら共に滅亡し合ってしまうのだから。

それは、単に人というだけでない。人の『コトバ』の側面も、コトバ For All Life であり続ければこそ、よき存在なのだ。人の『カタチ』の側面、『アタマ』の側面、『カラダ』の側面も、それぞれ、カタチ For All Life、アタマ For All Life カラダ For All Life であり続ければこそ、よき存在なのだ。なぜなら、For All Life の境地

であり続ければこそ、あらゆる存在は、愛し合い続けながら感謝し合い続けながら長く共存し合えるのだから。

これらのことは、この宇宙の中の、あらゆる存在について、これまで例外なくあてはまってきた普遍的な事実だろう。また、これらのことは、この宇宙の中、あらゆる存在について、これからも例外なくあてはまってく普遍的な分岐点でもあるだろう。

For All Life の境地で健やかに生きる地球人 For All Life ならば、マイホームプラネット——地球という1つの家に暮らす、1つの家族のメンバーであると言えるだろう。

つまり、この場合、地球という名の<sup>ホームプラネット</sup>家天体で暮らしている健やかな地球人類は、もはや、1つの家族なのだろう。

地球という<sup>ホームプラネット</sup>家天体で暮らすメンバーが家族でありうるくらいならば、ふつうの家で暮らす、核家族、3世代家族…のメンバーが家族であるだけでなく、学校や会社という名の<sup>ホーム</sup>家で暮らすメンバーも家族、市区町村という名の<sup>ホーム</sup>家で暮らすメンバーも家族、都道府県という名の<sup>ホーム</sup>家で暮らすメンバーも家族、国家という名の<sup>ホーム</sup>家で暮らすメンバーも家族、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカ…などの、それぞれの大陸や地域や島々という名の<sup>ホーム</sup>家で暮らすメンバーも家族ということがありうるのではないか？

そりゃ、ふつうの家族の中においてさえも、ときに、すれ違いや誤解、勘違いなどから、一時的にケンカ状態になることもあるかもしれない。それでも、家族であればこそ、話し合ったり、謝り合ったりして、許し合ったり、忘れ合ったり、軌道修正し合ったり、路線変更し合ったりして、境地を変え合ったり、仲よし状態に戻れて、長い目でみて、健やかに存続し続けられるのではないのではないか？

それは、人体という名の家——<sup>ホームヒューマンボディー</sup>家人体で暮らしている、細胞、

組織、臓器、器官系で暮らす細胞社会のメンバーが、1つの家族であればこそ、健やかに存続できることと同じではないか？

健やかな存続のためには、となりの人どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれることだけでなく、次のことも大事になるだろう。

となりの細胞どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの組織どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの臓器どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの器官系どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの学校どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの会社どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの町どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの村どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの市どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの都道府県どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの国どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの島どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの地域どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの大陸どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの天体どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの星どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること、  
 となりの銀河どうしが愛し合って、1つの<sup>ホーム</sup>家が生まれること…

“となり”も、“家”も、“家族”も、狭い意味から広い意味まで、対象範囲が広がるのが、せまい愛から広い愛へと愛が広がること、つまりは、For All Life 路線そのものに対応しているだろう。

もちろん、だれかと愛し合うためには、まず、自分が自分自身を愛することが不可欠だ。

でも、もし自分自身だけを愛し続けるならば、拙く幼く危険だ。自分自身だけでなく、自分の周囲をも愛すること、その愛を広めることが、成熟であり、お互いの健やかな存続に必要な不可欠なのだ。同様に、例えば、自分の国だけ、あるいは、自分の民族だけを愛し続けるならば、拙く幼く危険だ。自国だけでなく、自民族だけでなく、自分の周囲の国や、周囲の民族をも愛すること、その愛を広めることが、成熟であり、お互いの健やかな存続に必要なのだ。

今、地球では、さまざまな国や民族に分かれていて、さまざまな〇〇人が、互いに争い合っているけれど、将来、国や民族を超えた1つの家<sup>ホーム</sup>へとまとめ、地球人として、地球内で争い合うことがなくなり、地球内で平和を保ちながら、健やかに長く存続していけるかどうかの分岐点は、それぞれが愛を広げ、互いに愛し合えるかどうか、つまりは、For All Life 路線を貫けるかどうかだろう。この分岐点は、まさに健やかな全人類レベルのライフが誕生できるかどうかの分岐点でもある。

それは人体とも相似であるという意味でも一理あるだろう。

細胞、組織、臓器、器官系の区域に分かれている人体には、それぞれの区域の存在が最大限に尊重されながらも、互いに愛し合って1つの家<sup>ホーム</sup>へとまとまっているおかげで、人体内で争うこともなく、人体内での平和、人体の健やかさを保っているという一面がある。これがうまくいっているのは、各種の器官系、臓器、組織、細胞がFor All Life の境地であり続けているおかげだ。

その意味では、かつて、核戦争を防ぐために国を超えた政府が必要だとアインシュタインが考えていたことにも一理あることになるだろう。人体——人間レベルのライフの『アタマ』の方向の脳神経系に相当するような、全人類レベルのライフの『アタマ』の方向の

存在としての超国政府 For All Life なら、おおいに歓迎されるべきだろう。

例えば、もし地球超国政府 For All Life のような存在が誕生し、あらゆる国々が愛し合いながら1つの家<sup>ホーム</sup>としてまとまったなら、その暁には、さまざまな地球内戦が消失し、地球平和が訪れているだろう。その土台の上で、地球上で自然科学も十分に発達できて究極の再生可能エネルギーも健やかにフル活用されるだろう。そうなれば、地球全体が“1つの家族のための1つの楽園”になるのも夢じゃなくなるだろう。

それは、もしかすれば、ほかの天体においても同じだろう。

例えば、火星超国政府 For All Life、水星超国政府 For All Life、金星超国政府 For All Life…とか？ おかげで、ほかの天体においても、1つの家<sup>ホーム</sup>としてまとめられて、内戦もなく平和だろうし、その土台の上で、それぞれの場で、自然科学も十分に発達できて究極の再生可能エネルギーも健やかにフル活用されるだろうし、それらの天体全体が“1つの家族のための1つの楽園”になるのも夢じゃないだろう。

天体と人体が相似だから—— あらゆる人体どうしが愛し合えるように、あらゆる天体どうしが愛し合えれば、例えば、太陽系超惑星政府 For All Life を含む、さまざまな超惑星政府 For All Life とか、さらには、超恒星系政府 For All Life とか、超銀河政府 For All Life とか…が誕生できて、おかげで、あらゆる天体を含むこの宇宙は、1つの家<sup>ホーム</sup>としてまとめられ、内戦もなく平和だろうし、その土台の上で、それぞれの場で、自然科学も十分に発達できて究極の再生可能エネルギーも健やかにフル活用されるだろう。そうなれば、宇

宙のあらゆる場所が“1つの家族のための1つの楽園”になるのも夢じゃないだろう。

## それから何年も後の初夏(2)(何十年も後)

そういえば、コンパースは、この宇宙に無数に仲間がいるようなことも話していたっけ——。

——これって、宇宙にすでに無数に人類がいるということでもあるのだろうか？ もし、本当にそうだとすれば、いろいろ、わかってることがある——。

1つは、そもそも、何十億年もかけて、単純な物質→生体高分子→生体高分子社会→細胞→細胞社会→個体→個体社会→人間→人間社会…のような過程を経て、ある天体の中だけで人類が誕生したという説明は、宇宙で一番初めに誕生した人類だけに適用されるべき、ごくごく例外的な説明にすぎないはずだってことだ。つまりは、例えば、地球人が100%地球の中だけで原始生命からコツコツと誕生したという説明、この地球人類が宇宙で一番初めに誕生した人類であるという説明には無理があって、その説明は非現実的であるってことだ。なぜなら、今、地球上に何十億人もいる中で、ある一人が100%原始生命からコツコツと誕生したという説明、ある一人が地球で一番初めに誕生した人間であるという説明に無理があって、その説明が非現実的であるのと同じことになるのだから——。

もう1つは、地球人類も親人類を含む多くの方々の力添えのおかげで誕生して育っているという説明の方が、無理がなく、現実的であるってことだ。なぜなら、地球上の各人間が親を含む多くの方々の力添えのおかげで誕生して育っているという説明の方が、無理が

なく、現実的であるのと同じことになるのだから——。

——いや、もしかしたら、そもそも実は、地球人類は、まだ、赤ちゃんとして誕生さえしていなくて、子宮の中で育まれている胎児の状態にすぎない？ 健やかな全人類レベルのライフとして誕生していない限り、地球人類は、流産するか、無事に誕生するか瀬戸際に立ち続けているにすぎない？ だとすれば、親人類を含む多くの方々は、今にも、地球という名の子宮の中で、無事に育ってくれることを望み続けてくれている？ 将来、命懸けで誕生させんことを覚悟してくれている？

そうすると、この宇宙の豊かな恵みを受けて愛されながら健やかな全人類レベルのライフとして誕生することが、本物の宇宙デビューを意味している？ この地球の豊かな恵みを受けて愛されながら健やかな人間レベルのライフとして誕生することが、本物の地球デビューを意味しているように——。 …

いずれにせよ、もし宇宙に本当にすでに無数に人類がいるのならば、この地球で人間社会レベルによって多様な新たな人間が誕生し続けているように、この宇宙で天体生態系社会レベルによって多様な新たな人類が誕生し続けていると説明できるのは確かだろう。

だから、もし宇宙に本当にすでに無数に人類がいるのならば、その大部分は…先祖人類→親人類→人類→子人類→子孫人類→…の積み重ねの結果のおかげの存在だろう。地球上の何十億人も人間の大部分が…先祖人間→親人間→人間→子人間→子孫人間→…の積み重ねの結果のおかげの存在であるように——。

…

本当に、この宇宙に、すでに無数に人類がいるのだろうか？

それとも、そうではなく、地球人類は、宇宙で一番初めに誕生し

た、あるいは、誕生しようとしている、唯一の人類なのだろうか？

いずれにしても、誕生した赤ちゃんが成長し、成熟し、将来、ときに新たな赤ちゃんを誕生させて親となりうるように、誕生し、成長し、成熟した地球人類は、将来、ときに赤ちゃん人類を誕生させて親人類となりうるだろう。

また、いずれにしても、将来、別の天体に新たな人類を健やかに育むためにも、健やかに寿命を全うするためにも、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためにも、健やかな天体生態系社会のライフの一員化のためにも、For All Life 路線を貫くこと、For All Life の境地であり続けることが大事であるのは変わらないだろう。

また、いずれにしても、誕生したこと、あるいは、誕生しつつあることが非常にありがたいことは、変わらないだろう。

その恵みに、その幸運に、心から感謝し続けたいよ。

それが、どんなに、ありがたいことか——。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

…

——ああ、なんだか少し眠たくなってきたかも。

## それから何年も後の初夏(3)(何十年も後)

そう言えば、夢の中のランプベリー、おじいちゃん、心笑君は、生きているように感じられていたっけ——。

これらの夢の中の存在は、さすがに僕自身の『アタマ』の所産だろう。——それとも、みんなそれぞれの<sup>たましい</sup>魂とかと関連している？

いずれにしても、少なくとも、身体や物体が『カラダ』の方向にあるとすれば、夢と同様に、<sup>たましい</sup>魂は『アタマ』の方向にあるだろう。

もしかしたら、『アタマ』の中の『タマ』は、“たましい”の中の“たま”と同じ起源を持っていたりする？

同じように、<sup>ことだま</sup>言霊や<sup>みたま</sup>御霊の中の“たま”も『アタマ』の中の『タマ』と同じ起源を持っていたりする？

だとすれば、『アタマ』は、どんな“たま”なのだろう？

そう言えば、おじいちゃんの形見“アインシュタイン”も、<sup>たま</sup>玉だった。って、それは、たまたま？ っていうか<sup>かたたま</sup>形霊を意味していた？

それとも、結局、あらゆる“たま”は、『アタマ』の働きの所産の一部に過ぎない？ 『タマ』が『アタマ』の一部であるように——。

というか、そもそも、“たましい”や“れい”を含む、あらゆる“たま”は、ある意味、『アタマ』の中の『アタマ』ではないか？

思考のあり方、知識のあり方、感情のあり方、行動のあり方、考え方、知り方、感じ方、動かし方、頭のあり方、身体のあり方、心のあり方… つまり、人間のあり方を、意のままに決められるという意味の<sup>かなめ</sup>要の中の<sup>かなめ</sup>要——。

だから、“たましい”の中の“い”も“れい”の中の“い”も、実は、その本質は、“意”なんじゃないか？

だから、“たましい”や“れい”は、意識、意志、意欲、意思、意

図、意向、意見、意味、本意…を含む、あらゆる“意”を担っており、いずれも、知や情のあり方、頭や心身のあり方、人間のあり方を決めている存在という意味の要中の要、『アタマ』の中の『アタマ』であり、つまりは人間レベルの3ステップの一部なんじゃないか？

——もし人間のあり方を決める3ステップの一部が“人間霊”であるならば、植物や動物のあり方を決める3ステップの一部としての“植物霊”や“動物霊”、物質や宇宙のあり方を決める3ステップの一部としての“物質霊”や“宇宙霊”もありってことになる？

人間の“たましい”や“れい”は、“死後も生き残る”と言っている方もいるけれど、本当だろうか？

それが本当であろうとなかろうと関係ない。知や情、頭や心身のあり方を、意のままに決めることを通じて、人間として現実に対して働きかけられる“今、生きている”という、この状態が、どんなに特別で、どんなにありがたくて、どんなに貴重であるか——。

この“たましい”や“れい”を含む“意”の力で、意のままに、頭や心身のあり方を決められるからこそ、Against All Life → For All Lifeのように健やかに成熟することが実現できるのだろう。

いずれにしても、結局は、For All Life 路線を貫くこと、For All Life の境地であり続けることが大事であるのは変わらないだろう。

それらは、すでに亡くなられた方々のためにもなるだろう。

・・・ ——いや、ちがう？

すでに亡くなられた方々は、死んでしまった自身のためはいいかから、今の方々が生きるため、未来の方々が生きるために、今の方々に生きてほしがっている？ そうやって、ライフをリレーし続けてほしがっている？

いずれにしても、過去のすべての方々のライフのおかげ、今のすべての方々のライフのおかげで、なおかつ、今のすべての方々のライフのため、未来のすべての方々のライフのために—— その意味を込めて For All Life 路線を貫くこと、For All Life の境地であり続けることも、健やかな全人類レベルのライフの誕生のため、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化のために役立つだろう。

また、いずれにしても、この人間社会、人類が誕生し、今生きているのは、すでに亡くなられてしまった多くの方々が For All Life 路線を貫き、For All Life の境地であり続けていてくださったおかげでもあるはずだ。

やっぱり、心から感謝したいよ。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

…

そして、やっぱり——

For All Life！ いつも心笑！ いつかここへ！

For All Life！ いつも心笑！ いつかここへ！

For All Life！ いつも心笑！ いつかここへ！

…

——ああ、すっかり眠たくなってきたよ。

いったん、お昼寝でもしようか。おじいちゃんのように——横になった。でっかな青空が広がっている。白い雲が浮かんでいる。さわやかな潮風が全身をなでている。

それから目を閉じた。

ゆっくり、ゆったり深呼吸しながら——

お心笑しながら—— かつてのおじいちゃんのように——。

まどろみの中で、替え歌を作っちゃったりもしながら——。

作曲 初果ひるね 作詩 おじいちゃんひるねさんぽ——。

タイトル『Joy of Life』 —— 『生歓喜』？

ドコドコドコトバ♪ ココココココロ♪ イマイマイアタマ♪

ポカポカポカラダ♪ イキイキイキモチ♪

ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

アイアイアイデア♪ ワクワクワクワ♪ ニコニコニコエ♪

ポカポカポカラダ♪ イキイキイキモチ♪

ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

いつも、ここから♪ いつか、ここへ♪ ついに、ここに♪

ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

For All Life♪

All Life Forever♪ All Life Forever♪

ピピピーピピー♪

All Life For♪

All Life Forever♪ All Life Forever♪

ピピピーピピー♪

アイアイ、アイアイアイ♪ ワクワク、ワクワクワク♪

イキイキ、イキイキイキ♪ ニコニコ、ニコニコニコエ♪

ルンルン、ルンルンルネ♪ サンサン、サンサンサンクス♪

For All Life♪ All Life Forever♪

...

## ミライのいつか

健やかな全人類レベルのライフが誕生してから、ずいぶん長い時間が経過している。

協力関係、シナジー関係、『Love - Love の関係』…が増え続け、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員となり、本物の平和が訪れてから久しくなっている。

健やかさ——楽しみ、ユーモア、恵み、心笑、イキイキ、ニコニコ、ワクワク…を増やし続けながら、病みっぷり——疲労、疲弊、不安、強迫、脅迫、脅威、毒、欠乏、貧困、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…を減らし続けながら、『アタマ』と『カラダ』の両方において、健全な持続可能な世の中が実現し続けている。

全人類レベルのライフは、究極の再生可能エネルギーの恩恵を受けながら、ますます健やかに暮らし続けている。

食糧問題、燃料問題を含むエネルギー問題も、すかつと解消され続けている。

各種の気候帯の間の自然の恵みの格差も、全く解消されている。

紛争問題も、すかつと解消され続けている。

水不足、砂漠化、気候変動、環境汚染、生態系破壊…を含む環境問題も、きちつと解決され続けている。

自然治癒力も重視されながら、人口問題を含む医療問題の多くも、しっかつと解消され続けている。

十分に成熟した自然科学も、みんなに共有されながら、みんなのために、有効活用され続けている。

…

音楽 ♪夏 Summer イン ミライのいつかのある日その1へ続く

## ミライのいつかのある日その1

とある学校（～12歳）の夏の授業風景——。

「今日は、エネルギーが消費することを確かめる実験をします。みなさんは、高いところから物体が落ちている間に、物体の速さが増すことを知っていますね？」

「はい♪」

「それでは、この、高いところから落ちている間に速さが増すことによって、物体が獲得するエネルギー、詳しくは運動エネルギーによって、物体が床に落ちたときに何が起こるかについて、具体例を挙げて説明してみてください」

「——高い所から床に落ちたボールは、弾みます」

「そうですね。高い所から床に落ちたボールは、弾みますね。」

ほかに、ありますか？」

「高い所から床に落ちた卵は、べちゃつと割れてしまいます」

「泥だんごも、べちゃつとつぶれてしまうわ」

「雪玉も、べちゃつとつぶれてしまうよ」

「そうですね。高い所から床に落ちた、卵や泥だんご、雪玉は、べちゃつとつぶれますね。ほかに、ありますか？」

「——高いところから床に落ちた陶器やガラスのお皿は、大きな音を立てて、割れてしまいます」

「そのとおりですね」

「プラスチックや金属のお皿ならば、弾んで大きな音が出るよ」

「そのとおりです。ほかに、ないですか？」

「カスタネットやタンバリンならば、弾んで楽器の音が鳴るわ」

「その通りですね。ほかに、まだまだ、たくさんあると思います。

高いところから床へと物体が落ちると、弾んだり、割れたり、つぶれて広がったり、音が鳴ったり…します。

それでは、高いところから床へと物体が落ちた際に、弾んだり、割れたり、つぶれたり、大きな音が鳴ったり…するためのエネルギー源は何でしょうか？」

「高い所から落ちている間に物体が獲得する運動エネルギーです」

「大正解です」

「先生、自分で、最初に正解を話していたじゃん」

「フフフッ。そうでしたね。

つまり、高い所から床まで落ちている間に物体が獲得した運動エネルギーが、物体が弾んだり、割れたり、つぶれたり、音を出したり…の変化を引き起こすためのエネルギー源になったのです。

それでは、次に、物体をそうっと床に下ろすことを考えてみましょう。例えば、ボールをそうっと床に下ろしたら、どうなりますか？」

「弾みませんし、音も出ません」

「そうですね。卵をそうっと床に下ろしたらどうなりますか？」

「卵は割れませんし、丸い形のままです」

「そのとおりですね。泥だんごや雪玉は、どうですか？」

「泥だんごや雪玉は割れず、そのまま丸い形のままです」

「そうですね。お皿は、どうですか？」

「割れませんし、弾みませんし、音も鳴りません」

「カスタネットやタンバリンは、どうでしょうか？」

「音が鳴りません。静かなままです」

「それでは、物体をそうっと床に下ろしたときは、なぜ、そうならず、そのままになるのでしょうか？」

さきほどの、物体が弾んだり、割れたり、つぶれて広がったり、音を出したり…するためのエネルギー源、運動エネルギーは、どうなったのでしょうか？」

「そんなの簡単だよ。消滅したんだよ」「エネルギーの消滅は、常識中の常識だわ」…

「そうですね。よく知られているように、運動エネルギーは、消滅したのです。

今、みなさんは、エネルギーが消滅することを、あたりまえの常識として知っています。

しかし、過去に、何百年の間、“エネルギーは消滅しない。エネルギーは永久不滅である”と、心底思い込み続けていた時代が、人類にはありました。

かつて、あらゆる物理学の教授や教師も含めて、ほとんどの人間が、エネルギーは永久不滅だと思い込んでいたのです」

「先生、どうして、そんなに、おバカさんだったのですか？」

「これこれ、おバカさんなんて決して言ってはなりませんよ。逆に利口すぎたのかもしれないのですから。

当時の人類にとって、エネルギーの永久不滅こそが、最新最高の自然科学の基礎だったのです。例外のないエネルギー保存則は、当時、あらゆる教科書に印刷され、あらゆる教師が教え、あらゆる生徒・学生が学んで身につけていた常識だったのです。当時、あらゆる学者が、この例外のないエネルギー保存則を常識にしながら学問

を育んでいました。当時は、老若男女、ほとんど誰もが、心の底から、例外のないエネルギー保存則が最も普遍的な真理だと思い込んでいたのです。当時、人類最高の頭脳を持っていると崇められていた、アインシュタインという物理学者も例外ではありませんでした」

「それなのに、どうして、人類は、エネルギーが消滅することに気づくことができたのですか？」

「それは、ココエのおかげです。ココエが、初めて、はっきりとエネルギーの消滅を体系的に示したおかげだったのです」

「知ってる、知ってる。ココエのりんごだろ？」 「有名だよね」  
「そうですね。万有引力の法則がニュートンのりんごならば、エネルギーの消滅はココエのりんご。

ココエは、考えごとに没頭しているときに、手に持っていた大好きなりんごを、あやまって落としてしまったのです。

りんごは、大きな音を立てて床に落ちてしまいました。

ココエは、そのりんごを拾い上げると、大好きなりんごの傷つきよう、へこみようを見て、嘆きました。

でも、そのあと、ココエは、ピンときたのです。

りんごを高い所から落とせば、音を立てたり、りんごが傷ついたり、へこんだりする。しかし、りんごをそうっと下ろせば、傷つかないし、へこまないし、音が鳴らない。これは、いったいなぜなのか？

ココエは、その疑問を、とことん、つきつめ続けました。そのような思索の結果生まれた成果が、当時の常識を覆していた“エネルギーの消滅”の発見であり、それが、彼が育んでいた新しい物理学を支えることになりました」

「おもしろい♪」 「おもしろいね♪」

「おもしろいですね。

ニュートンは、落下するりんごをヒントにして、万有引力の法則を発見したと言い伝えられています。

ココエは、あやまって落としてしまったりんごをヒントにして、エネルギーの消滅を発見したと言い伝えられています。

さあ、みなさんも、りんごから何か新しい発見ができるかもしれませんよ。チャレンジしてみてくださいね♪」

「ハイ♪」

音楽終了 ♪夏 Summer

## ミライのいつかのある日その2

とある学校（～15歳）の秋の授業風景——。

音楽イン ♪秋 Autumn

「みんなも知っているように—— かつて、エネルギーは永久不滅であり、生成も消滅もしないと心底信じていた人が大多数だった時代が300年以上も続いたんだ。当時、最も有名で偉大だった物理学者の一人、アインシュタインまでも心底信じきっていたほどだった。

このエネルギーの永久不滅の原理を土台にする例外のないエネルギー保存則は、当時の最新最高の科学の1つ、一般相対性理論を育む支えになったことを含め、ある程度は確かに役立っていた。

しかし、そのせいで、物理学の進歩は停滞し、人類は、究極の再生可能エネルギーの十分な健やかな利用から長らく遠ざかり続けることになった——」

「300年も、例外のないエネルギー保存則を信じていた人々が、ほ

とんどだった時代があるなんて信じられないよ」「例外のないエネルギー保存則のせいで、究極の再生可能エネルギーの十分な健やかな利用から長らく遠ざかっていたなんて、当時の人々は、なんて愚かだったんだろう」

「こらこら、決して愚かなんて言うてはいけないよ。彼らは、一生懸命、全力で、心底、そう思いこみ続けていたのだから。

——みんなは、どうして、こうなったと思うだろうか？」

「人は流されやすいからよ」「自分を守るために同調するからさ」

「不安だったからだわ」「疲れていたからよ」「何となくさ」

「地球中心が好きだったように、永久不滅が好きだったからよ」…

「そうだね。どれも原因として考えられる」

「先生は、どう思っておられるのですか？」

「先生は、思うんだ。結局は、多くの人が、心の自由を持っていなかったからじゃないかって——。

もし、多くの人が心の自由を持っていて、自由に感じて、自由に考える習慣を持っていたら、決して、こうはなり続けなかっただろうって——。

「——」

「今は、りんご、卵、皿、ボール、楽器…をそうっと下ろす過程、たったこれだけの簡単な過程によって、エネルギーの消滅が実証されていることに、誰でも気づくことができる」

「ココエのりんご——。誰でも、どこでも簡単に実証できる、わかりきった常識です」生徒の一人のつぶやき。

「ところが、かつての人々にとっては、その常識が、逆に、とんで

もない、ばかげた非常識だった。先生が目目してほしいのは、人類が、その今の常識に気づくまでの300年もの間、何十億何百億人もの人々が、物をそうっと下ろす過程を体験していたことだよ」

「——」

「目の前でエネルギー消滅の実証実験が何億回も何兆回も繰り返されていたのに、そのことに誰も気づけなかったのは、なぜだったのだろうかと、ここで改めて考えてみてほしいんだ。

いや、もしかしたら、誰かは、とっくに気づいていたのかもしれない。でも、とっくに気づいていた誰かも、なぜ、そのことについて深く考えようとしなかったのだろうか？あるいは、その考えを公表しようとしなかったのは、なぜだったのか？そんなふうに考えてみてほしいんだ」

「——先生は、心の自由を持っていなかったからだとお考えなのですね？」

「そうだね。先生は、誰もが身につけていた当時の古い常識が、結局、心の自由を奪い続けていたからじゃないかと思っている。

より具体的には、例外のないエネルギー保存則という古い常識にしばられていた者が、新しい常識の芽に“非常識なナンセンス”とレッテルを貼って排除していた時代であったがゆえに、不安が植えつけられ、人々の自由な感情のあり方、自由な思考のあり方が奪われ続けたからだと思っている。

それは、まるで、裸の王様を目の前にしているのに、みんなで口をそろえて、“見事な服を着ている”と言い張り続けていたような時代であり続けていたからとも言えるだろう。

そのような時代が、300年以上もの間、続いていたんだ——」  
 「信じられないわ」「信じられないよ、先生」  
 「信じられなくても、事実だよ。エネルギーの永久不滅を300年以上もの間、人類は、みんなして肯定し続けていたんだ。

その間、誰も、裸の王様が裸だとは言えなかったんだ。

当時の、最も優秀で、最も疑り深かった物理学者の一人アインシュタインでさえも、死ぬまで裸だと言えなかったくらいに——」

「先生、地球の周りを太陽が回っていたと信じられていた時代に起きていたことと似ていますね？」

「そうだね。似ているね。天動説が信じられていたのは、2000年もの間だったけれど——」

「2000年！」

「この場合、人類は、2000年もの間、裸の王様が裸である事実を認められなかったことになる——」

「——」

「あらゆる常識は、誰も疑問を投げかけないからこそ常識であり続ける。だから、あらゆる常識は、周りに流されて思考停止したまま何となく鵝呑みにし続けているおかげで保たれている幻想にすぎない可能性を秘めているんだ。“裸の王様は美しい服を着ている”と同等な幻想にすぎない可能性を——。

一方で、思考停止したまま常識を守り続けることは、同時に自身の不安を減らすことにもつながっている。思考停止したまま“裸の王様は、裸だ！”と指摘せずに“裸の王様は美しい服を着ている”と思込み続けることが自身の不安を減らしていたはずであるように。

だから、何かの常識を守り続ける者は、自身の不安を減らし続けたいからこそ、たとえ幻想であっても、この常識に疑問を抱く者を反射的に排除してしまう。

ただ、そのせいで——

ブルーノは、火あぶりにあってしまった。

ガリレオは、死ぬまで自由を奪われ続けた。

そして、ココエは、失職してストレスで早々と死んでしまった」  
 「かわいそう」

「そうだね。君たちは、ココエのりんごについてだけでなく、“ココエの苦難”についても、よく知っていると思う。

——確かに、ココエは、かわいそうだったけれど、ココエのりんごを含むココエの成果がきっかけとなって、人類は、例外のないエネルギー保存則という古い常識、幻想的な常識を覆すことができた。

最初の頃、気づいた人は、ごく少数だけだった。

それでも、少しずつ少しずつ増え続けたんだ。

研究ポストについていない無給のボランティア科学者も、研究ポストについている有給の科学者も、ともに気づき始めた。

中には、リスクをかえりみず、支持を表明する者も現れた。

中には、“エネルギーの永久不滅性の考えや例外のないエネルギー保存則の考えに基づいて、エネルギー消滅やエネルギー生成を完全否定すること”のナンセンスさにも気づいた人もいた。

それもこれも、多くの人がウワサをよく確かめるべく、自由に感じながら、自由に考えながら、それぞれのやり方で再発見し、“ココエ体験”を満喫したおかげだった。

それぞれが、直視した自然についての現実を勇気を振りしぼって公表してくれたおかげで、真実への気づきが広まり続けた。

数人が気づき、数十人が気づき、数百人が気づき、数千人が気づき、数万人が気づき…そんなふうにして真実への気づきが指数関数的に広まり続け、いつしか、エネルギーの非永久不滅性、エネルギー保存則の例外は、人類にとっての新しい常識となった。

2000年以上かけて「地球中心、天動説」の呪縛が解かれたように—— 300年以上かけて、ついに「永久不滅のエネルギー、例外のないエネルギー保存則」の呪縛も解かれたんだ。

その結果、全人類は、ついに、究極の再生可能エネルギーの十分な活用に、健やかに取り組めるようになった。

おかげで、全人類は、さらなる飛躍を遂げることができた。

地球環境や地球生態系、全人類の営みを支えるためのエネルギー源として、環境に優しい究極の再生可能エネルギーを上手に活用しながら、全人類は、ますます住み良くなった地球上で、ますますハッピーさを増やし続けた。

エネルギー不足問題もなくなった。

食糧不足問題もなくなった。水不足問題もなくなった。

多様な気候帯の間の自然の恵みの格差もなくなった。

争う理由もなくなった。紛争問題もなくなった。

気候変動を自在にコントロールできるようにもなった。

過剰な温暖化や寒冷化の予防も可能になった。

天体の地球落下の予防も、より簡単に可能になった。

これらのことは、健やかに地球上で暮らしていくことだけでなく、

健やかに別の天体へ進出することも助けた。

誰もが心豊かになった。自由時間が増えた。余暇が増えた。

誰もが自分の才能をイキイキと開花させる、健やかな自己実現社会が到来した。

楽しみが増えた。喜びが増えた。安らぎが増えた。

健康が増えた。笑顔が増えた。心笑が増えた。

ニコニコが増えた。イキイキが増えた。ワクワクが増えた。ウキウキが増えた。ホワホワが増えた。ピンピンが増えた。ユウユウが増えた。

…

つまり、現在があるのは、あれもこれも、みんな一人一人が、心の自由を取り戻し、自由に感じ、自由に考え始め、ただ何となく<sup>う</sup>呑みにして受け入れていた古い常識の真偽をよく確かめ続けたおかげだったんだ。ココエのりんごも、いいきっかけの1つになりながら——。

それは、同時に、みんな一人一人の心の再生、復興、全快…のおかげ、一人一人の、クヨクヨ、ビクビク、オドオド、ウツウツ、モンモン、ヘトヘト、ムカムカ、イライラ、ビリビリ…から、ニコニコ、イキイキ、ワクワク、ウキウキ、スイスイ、ヒョウヒョウ、ホワホワ、アイアイ、ルンルン、ピンピン、ユウユウ…への主体的な方向転換のおかげでもあった。

この主体的な方向転換が、私たちの中にもともと備わっている、自然治癒力の根幹であり、再生可能<sup>再生</sup>心エネルギーの根源なんだ。

再生可能<sup>再生</sup>心エネルギーという言葉を最初に使い始めたのは、まさ

に、究極の再生可能エネルギーという言葉をもとに使い始めたココエ自身だった。

ココエは、この再生可能心エネルギーのおかげで、心の自由を得ることができ、数々の絶望を乗り越えながら、すばらしい成果を誕生させることができた。

つまり、人類を飛躍させる究極の再生可能エネルギーの十分な健全な利用をもたらした大元は—— 心の自由を生んだ再生可能心エネルギーでもあったんだ」

「おもしろい♪」

「そうだね。おもしろいね。」

だから、みんなは、頭だけでもなく、体だけでもなく、ぜひ、心も大事にし続けてほしい。ココエのように——」

「ハイイ♪」

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

## ミライのいつかのある日その3

とある学校（～18歳）の冬の授業風景——。

音楽イン ♪冬 Winter

「かつて、人類は病を患い、長い暗黒時代を過ごし続けました。

パイ取り合戦、フルーツ争奪合戦、不満足、不知足、相互破壊、相互絶滅…これらの病、Against Life 病に、人類が翻弄され続けた時代を何と呼びますか？」

「“人類の進化の傷あと時代”と呼びます」

「そうですね。この時代に、人類は、さんざん、不幸を経験し、不幸をまき散らし合い、不幸を互いに強要し合い続けました。

そう。人類は、何百年何千年もの長い間、まさに病を患っていたのです。

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

音楽イン ♪春 Spring

しかし、人類は、病を治し、どうにか健やかに再生できました」  
「誰のおかげでしたか？」

「当時の、みんな一人一人のおかげです」

「当時の、みんな一人一人の何のおかげでしたか？」

「当時の、みんな一人一人の気づきのおかげです」

「当時の、みんな一人一人の、何の気づきのおかげでしたか？」

「常識ですよ。Against Life 病が蔓延していること、健全さを取り戻すためには、最終的に、For All Life 路線をとり続けることが大

事であることの気づきのおかげです」

「その通りですね。ココエが活躍していたころから、あらゆる分野、あらゆる場面において、Against Life 病が蔓延していることに、気づいたおかげです。

それは、人間社会におけるあらゆる苦難、害悪、罪悪の本質が、“他者が犠牲になるのはよく、自分らさえよければいい”的な発想に基づく Against Life 病であることに気づいたおかげであり、同時に、人間社会におけるあらゆる幸福、善益、功德の本質が、“自分らだけでなく、みんなも喜ぶことこそがよい”的な発想に基づく For All Life 路線であることに気づいたおかげでもあります。

それは、この地球上であらゆる人間社会どうしが争い合い続けることが、個体の中であらゆる細胞社会どうしが争い合い続けるほど

に、愚かで不健康であることに気づいたおかげでもあります。

つまり、一人一人が、Against Life 病が、あらゆる不健全さ——  
 邪悪さ、醜さ、不毛さ、不調和、不快さ、不信、憎しみ…の根源で  
 あることに心の底から気づき、その上で、一人一人が、あらゆる健  
 やかさ——善良さ、美しさ、豊かな実り、調和、心地よさ、信頼、  
 感謝…の根源である For All Life 路線をとるように心の底から転換  
 することが、みんなに広まり続けたからこそ、人類全体も気づき、  
 再生できたのです。

この時代のことは、ふつう、何時代と呼ばれていますか？」

「ルネサンス時代と呼ばれています」

「そうですね」

「先生、ルネサンス時代ではなく、ルネサンス時代と呼ばれてい  
 るのは、なぜですか？」

「わかりません。

いずれにせよ、このルネサンス時代に、一人一人の気づきのお  
 かげで、それまで人類の中で、ひどく流行<sup>はや</sup>っていた Against Life 病  
 が少しずつ克服され、For All Life 路線の健康な状態への再生が少  
 ずつ広まり続け、ついに全人類が健康を取り戻すに至ったのです」

「どうして、ルネサンス時代に、それが起こったのですか？」

「さまざまな要因が考えられています。

その中で、特に、ココエのりんごの実証実験を通じた気づき、お  
 よび、その気づきをきっかけとした、心の底からの変化——ビクビ  
 ク、クヨクヨ、モンモン、ヘトヘト、ピリピリ…から、ニコニコ、  
 イキイキ、ワクワク、ウキウキ、ホワホワ…への心の再生——が広

まり続けたことも大きかったと言われてしています。

さらには、ココエの示した再生可能<sup>こころ</sup>心エネルギーの考えが、大き  
 な影響をおよぼしたとも言われています。

ですので、ルネサンス時代は、“心再生”時代、あるいは、とき  
 に“心笑再生”時代とも呼ばれています。

——ココエは、次のような言葉を残しました。

“電荷エネルギーや磁極エネルギーがくめども尽きない究極の再生  
 可能エネルギーであるとするならば、心のエネルギーは、くめども  
 くめども尽きない超究極の再生可能エネルギーである——”

彼は、何度も何度も絶望を乗り越え続けながら、健やかな自己フ  
 ルーツ化——“自己実現 For All Life”を果たしました。

彼は、すてきな“フルーツ For All Life”を生み出しました。

私たちが彼を多くに見習いましょう」

「ハイ♪」

「そこで、最後の課題です。

みなさんは、どのような健やかな自己フルーツ化——どのような  
 “自己実現 For All Life”を果たしたいでしょうか？

君らは、どんな“フルーツ For All Life”を生み出したいですか？

それを、少しずつ、レポートにまとめてみてください。

提出義務は、ありません。

提出期限も、ありません。

高校を卒業してから、提出してもかまいません。

大学を卒業してから、提出してもかまいません。

就職してから、提出してもかまいません。

結婚してから、提出してもかまいません。

社会人を引退してから、提出してもかまいません。

…

ゆっくり、自分自身を見つめながらまとめてみてくださいね。

もし提出したくなったら、いつでも提出しにいらっしゃい。

教師たちは、代々、受付を引き継いでおきますから——。

今日は、この学校生活、最後の歴史の授業ですね。

少し、早いですが、みなさん、ご卒業、おめでとう。

みなさんの活躍を楽しみにしています」

音楽終了 ♪春 WSpring

## はるかにミライのいつか——

地球上で誕生した健やかな全人類レベルのライフは、天体生態系社会レベルのライフ——宇宙生態系レベルのライフの一員として健やかに宇宙デビューを果たしながら、立派に活躍し続けている——。

どこかの天体での核爆発の発生シグナルがキャッチされた。

「はあー、始まってしまったわ」

「また核爆弾を使い始めてしまったよ」

「ある意味、いずれ、遅かれ早かれ、この道をたどることが少ないのだけれど——」

「ただ、それでも、今回は、まだ望みがありそうよ」

「なんといっても被爆種が、全く復讐しようとしていないからね」

「復讐するどころか、核兵器の廃絶を率先して推進しているからね」

「そうね。でも、これが、レアで貴重な一歩だって聞いたわ。」

それにしても、どうして、多くの異星人類の一部の種は、病み続けて復讐に燃え続けてしまうのかしら」

「1つは、被害者の無念に心を痛めて悲しみが止まらず、心が安らかなにならないままだからだろうね。ある意味優しすぎるのさ。でも、全く気の毒なことさ。1つの天体の中で病み続けて、アンチ非自種の方針をとり続けてしまうことは、1つの人体の中で病み続けて、アンチ非自細胞、アンチ非組織、アンチ非自器官の方針をとり続けてしまうほど愚かで、新たな悲惨な結果を招いてしまうのだから」

「そうね。悲しくてつらいけれど、この愚かさや新たな悲惨さに自ら気づいて自身で病を克服できるような賢い人類でなければ、宇宙デビューする資格はない。アンチ非自種を正当化し続けるような愚

かな未熟人類は、厳しいけれど、地球からも退場してもらわないといけない。次の新しい人類にチャンスを与えるためにも——。

もちろん、最初から宇宙デビューの資格があるなんてことは稀で、“罪を憎んで種を憎まず”の言葉が示唆しているように、過ちに気づいて軌道修正する可能性がある限り、本来どの未熟人類にも資格を得る望みがある」

音楽イン ♪ Birthtime

「ひとまずは、チャンスを与えられた、この新しい異星人類に、病から再生して無事に育ち続けることを期待するしかないですね」

「そうですね。どうか病が治って無事に育ち続けますように——」

「今回の新異星人類は、病から再生できて、無事に育ち続けて、健やかな誕生に至り、愛されながら繁栄し、宇宙の宝となれるだろうか？ それとも、病から再生できないで、流産して、あるいは、中絶させられて、健やかな誕生を果たせず、疎まれながら滅亡し、宇宙の屑くずとなるだろうか？」

「早く気づいてほしいね。この重大な分岐点の存在に——。

病から再生できれば、存続。誕生。愛され、繁栄。宝。

病から再生できなければ、流産。中絶。疎まれ、滅亡。屑くず。

そんな、あたりまえのことに——」

「本当に、早く気づいてほしいよ。」

病から再生できなければ、他滅だけでなく自滅が待っているということ。そんなに、悲劇的でもつたいないことに——」

「本当に、早く気づいてほしいね。病から再生できれば、みんなが存続できて、健やかに誕生&宇宙デビューできて、いいことづくめが待っていること。そんなに、おいしくてありがたいことに——」

「この分岐点の存在を、今すぐ教えてあげたいけれど、自然治癒を待つしかない——」

「お願い。早く気づいて。早く」

「気づいて、病から再生できれば、この新異星人類も、健やかな恒久的平和、健やかな宇宙デビューにたどり着ける」

「たどり着いてほしいね。」

新しい人類も、いつかここへ——」

「全く、そうだね。——気づいてくれ！ 気づいてくれ！ 再生してくれ！ 再生してくれ！ どうか、無事に育ち続けてくれ！」

「無事に育って！ 無事に育って！

そうして、無事に、宇宙へ誕生してきて！ そうして、この宇宙の新たな宝になって！ そうして、お祝いされて、愛され続けて！」

「ルネサンクス、ルネサンクス、ルネサンココエ、ピピピーピピー♪」

「なんですか？ それは」

「はらかなカコから伝わるという、おまじないでござる」

「不思議な響き——。——ルネサンクス、ルネサンクス、ルネサンココエ、ピピピーピピー♪」

…

音楽エンドロールに続く ♪ Birthtime

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For All Life

エピローグ

～分岐点～

【完】